

VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2025 9 September

特集

情報活用能力を 学校全体で どう育成するか？

北海道
札幌西陵高校
表紙の学校



今号の掲載校

高知県立高知追手前高校 / 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校 / 三重県立名張青峰高校 /
兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校 / 福岡県立筑紫丘高校 / 岩手県立一関第一高校・附属中学校 /
兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校 / 岐阜県立中津高校 / 長崎県立松浦高校

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

AO入試で不合格の生徒。
その後の受験勉強も
振るわない中、
教師の私には見えない
変化と成長を遂げていた

高知県立高知追手前高校 杉山太夏子

すぎやま・たかこ ●同校に赴任して1年目。教頭。
数学科の教師として、生徒は目の前の問題を
どのように捉えているのか、つまづいているとしたら、
それはどこで、どのように考えたからなのかなど、
常に生徒目線での授業づくりに注力してきた。



3 年生の A さんは、高校入学当初から、ある国立大学の学部・学科に興味を持っていて、同学科の公開講座や学科説明会にはすべて参加していました。今から 10 年ほど前、その学科は AO 入試（現・総合型選抜）を行っていました。入試科目は小論文と面接で、評定平均値は出願条件に入っていました。A さんは 1 年生の時から成績が振るわなかったため、一般入試（現・一般選抜）よりも AO 入試の方が A さんにとって、現役で合格できる可能性のある選択肢なのではないかと、クラス担任の私は考えていました。ただ、A さんが AO 入試に挑戦することには懸念もありました。AO 入試の対策が負担になり、一般入試に向けた学習がおろそかになるのではないかと。AO 入試で不合格となった場合、A さんは一般入試に向けて気持ちをうまく切り替えられるのだろうかという懸念です。

悩んだ末、私は 5 月の面談で A さんに「大学への思いを、AO 入試で大学に直接伝えてみては？」と提案しました。A さんは AO 入試の受験を決意し、小論文の対策を始めました。しかし、10 月に実施された AO 入試の結果は不合格。気落ちしている A さんに私は、「一般入試に向けて頑張ろう」と声をかけました。A さんは気を取り直し、一般入試の対策を再開しようでしたが、受験勉強の成果は目に見える形では表れてくれませんでした。A さんは気持ちの切り替えがうまくできていないのかもしれない……。A さんに AO 入試の受験を勧めたことに対して私は、後悔の念に駆られ始めました。

ところが 12 月の三者面談で、A さんの母親がにこやかに私に言ったのです。「AO 入試を受験してよかったです」と。不合格だったのにどうしてだろうといぶかる私に母親は、AO 入試での不合格を境に、A さんは朝早く自分で起きてきて、登校前に勉強するようになったと話してくれました。母親の隣に座る A さんは恥ずかしそうな表情を浮かべていました。

A さんは、私の見えないところで行動を変えていたのです。その後、A さんは大学入試センター試験（現・大学入学共通テスト）で目標点を獲得。個別試験で課される小論文の対策を早くから始めていたことも功を奏し、一般入試で合格しました。

A さんの再起と変化を私が見通せていたかと問われると、答えは「いいえ」です。それぞれの生徒には努力や心の強さなど、教師には見えていないものがたくさんあることを、A さんは見事な逆転合格を通じて私に教えてくれました。

AO 入試で不合格となった A さんに、杉山先生はきめ細かに支援を続けましたが、A さんの変化には気づけなかったそうです。生徒を見取る難しさについて杉山先生が語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article32487/>

巻頭 先生なら、どうしますか？

AO入試で不合格の生徒。その後の受験勉強も振るわない中、
教師の私には見えない変化と成長を遂げていた
高知県立高知追手前高校 杉山太夏子

2 特別企画

次期学習指導要領における「主体的に学習に取り組む態度」の評価の改善の背景と方向性
文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 × VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇

4 特集

情報活用能力を 学校全体でどう育成するか？

- 6 課題整理 中京大学教養教育研究院 教授 泰山 裕
- 10 事例1 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校
- 14 事例2 三重県立名張青峰高校
- 18 事例3 兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校
- 22 Commentary 静岡大学教育学部 学校教育講座 准教授 塩田真吾

26 発問・課題設定をキーに見る 主体的・対話的で深い学び 授業実践

英語

福岡県立筑紫丘高校 徳永拓也

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

30 ブラッシュアップ 授業実践

数学

岩手県立一関第一高校・附属中学校 長岡拓郎

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

34 「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校
探究学習の目標を明確化し、高校生活と接続

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36 事例で深める！ 学習評価

岐阜県立中津高校

単元テストと多様な評価方法の導入

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

38 指導変革の軌跡

長崎県立松浦高校

生徒支援の充実のための外部連携

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

42 大学入試トレンド解説

現3年生のデータから見える、
今後の進路・学習指導のポイント

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

46 VIEW'S REPORT

「高校生サミット IN 奄美 2025」レポート

52 Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINE でもご覧いただけます。

印刷製本／株式会社協同プレス 編集協力／有限会社ベンダコ 執筆協力／二宮良太 撮影協力／荒川 潤、岸 隆子、筒井岳彦、福山 哲、松原 誠、ヤマグチイッキ イラスト協力／カモ
※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。©Benesse Corporation 2025

次期学習指導要領における

「主体的に学習に取り組む態度」の 評価の改善の背景と方向性

2025年7月4日に開催された、中央教育審議会（以下、中教審）の教育課程企画特別部会第10回で、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の観点の1つである「主体的に学習に取り組む態度」を、次期学習指導要領では個人内評価とするという改善案が文部科学省から示された。その背景と具体的な内容、現行の学習指導要領の下で行われる教育活動への影響などについて、文部科学省初等中等教育局の田村学主任視学官に、VIEWnext編集部統括責任者の柏木崇が聞いた対談記事（『VIEWnext ONLINE』に掲載）をダイジェストで紹介する。

「主体的に学習に取り組む態度」 の評価に関する改善案

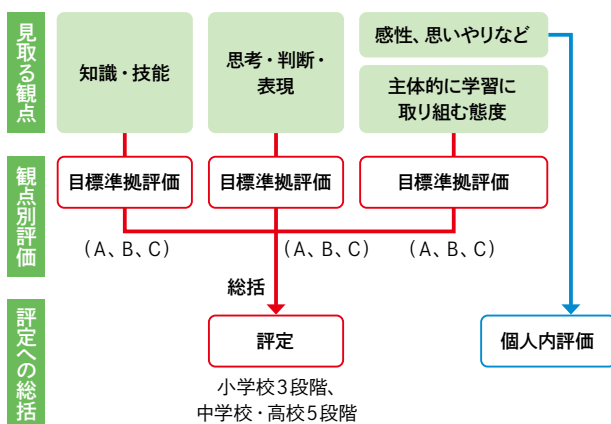
中教審の教育課程企画特別部会で、「主体的に学習に取り組む態度」を含む観点別評価に関する次のような改善案が示された。

「主体的に学習に取り組む態度」を 個人内評価とする。

「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」については、「目標標準評価」から、教育課程全体を通じて個人のよい点や可能性、進捗の状況等に着眼して評価する「個人内評価」へと変更する。

現行の学習指導要領では、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」については、「目標標準評価」から、教育課程全体を通じて個人のよい点や可能性、進捗の状況等に着眼して評価する「個人内評価」へと変更する。

これまでの観点別評価のイメージ



※中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点資料を基に編集部で作成。

対談記事より抜粋・再構成



柏木崇・VIEWnext編集部統括責任者
「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」が個人内評価となることで、「学びに向かう力・人間性等」の育成や評価に対する意識が低下するのではないかと危惧もあります。

田村学・文部科学省初等中等教育局主任視学官
「学びに向かう力・人間性等」が社会で一層求められていることや、大学入試において総合型選抜・学校推薦型選抜が拡大し、「学びに向かう力・人間性等」も重要な評価対象となっていることは周知の通りです。生徒のやる気や協調性、自制心などを教師が肯定的に評価することが、その生徒の全人的な成長につながるという経験は、多くの先生が有しているものと思います。そのため、「学びに向かう力・人間性等」の育成や評価が軽視されるようなことはない、私は考えています。



組む態度」を「粘り強さ」と「学習の自己調整」の2つの側面から評価しているが、「主体的に学習に取り組む態度」が個人内評価になると、「感性・思いやりなど」と「主体的に学習に取り組む態度」を分ける必要がなくなるため、評価観点を「主体的に学習に取り組む態度」から「学びに向かう力・人間性」へと変更することが併せて検討されている。

「学びに向かう力・人間性等」が特に表出された場合は、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記する。

「学びに向かう力・人間性等」と「思考・判断・表現」は親和性が強く、思考・判断・表現の過程で「学びに向かう力・人間性等」の一部が見て取れることが考えられる。

そのため、各教科における思考・判断・表現の過程で、学びの主体的な調整や他者との対話・協働などによって「学びに向かう力・人間性等」が特に表出した場合には、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記することも検討されている。

対談記事の全文はこちら

本記事は25年9月4日に、『VIEW next ONLINE』に掲載した学校教育関係者向けの記事を、高校教師向けに再編集したダイジェスト版です。同記事の全文には

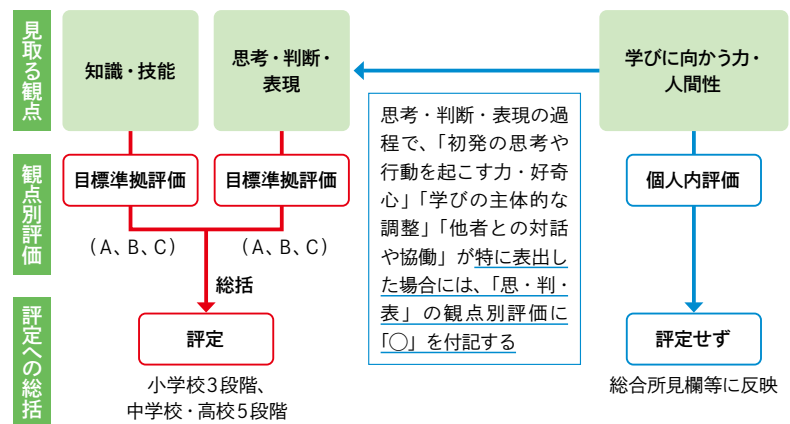
<https://view-next.benesse.jp/view/web/article33384/>

または下記の2次元コードから

アクセスしてください。



次期学習指導要領における新たな観点別評価のイメージ



※中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点資料を基に編集部で作成。



田村

これまで「主体的に学習に取り組む態度」の目標準拠評価に取り組んできた先生方は、その実践を通して、「主体的に学習に取り組む態度」が育まれた生徒の姿を見取り、言語化する力を高めるとともに、「主体的に学習に取り組む態度」の育成・評価方法を磨き上げてきました。そうした経験は、「主体的に学習に取り組む態度」を含む「学びに向かう力・人間性等」が個人内評価になっても、大いに生きるものと思っています。すなわち、現行の学習指導要領の下での実践は、次期学習指導要領にもしっかりとつながっていくものであると考えていただきたいと思います。



柏木

現行の学習指導要領の下では、現場の先生方は学習指導要領の次期改訂に向けた議論をどのように捉え、学習評価の実践を積み重ねていけばよいとお考えですか。



田村

「思考・判断・表現」の評価の過程で、「学びに向かう力・人間性等」を構成する要素が特に表出された場合に、「思考・判断・表現」の観点別評価に「○」を付記することが検討されています。つまり、「思考・判断・表現」の評価の過程で「学びに向かう力・人間性等」を見取るため、パフォーマンス評価などの重要性は今後も変わらないでしょう。



柏木

「主体的に学習に取り組む態度」の評価を見直すことにより、ペーパーテスト偏重の評価へと戻ってしまう懸念はないでしょうか。

全体でどう育成するか？

図1 現行の学習指導要領における情報活用能力の定義

- 情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結びつきとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。
- 情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピューター等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。
- こうした情報活用能力は、各教科等の学びを支える基盤であり、これを確実に育んでいくためには、各教科等の特質に応じて適切な学習場面で育成を図ることが重要であるとともに、そうして育まれた情報活用能力を発揮させることにより、各教科等における主体的・対話的で深い学びへとつながっていくことが一層期待されるものである。
- 各学科に共通する教科である情報科は、高等学校における情報活用能力の育成の中核を担うものであるが、その育成においては情報科と他の各教科・科目等とが相互に関連を図ることが重要であり、また、他の各教科・科目等においても積極的に実施していくことが必要である。

※文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」から一部を抜粋して編集部で作成。下線は編集部によるもの。

図2 高校生の情報活用能力の状況（レベル9～1のうち、レベル9～4を抜粋）

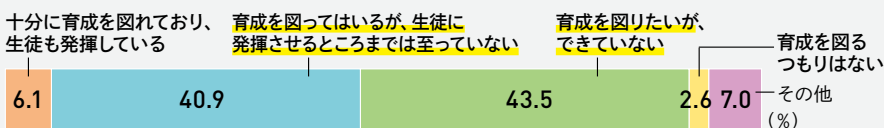
レベル	高校生の割合（%）	調査の結果を基に想定できる各レベルの生徒が身につけている情報活用能力の例
レベル9 669点以上	9.7	①アプリケーション、システム、デジタルの特徴を理解している ②他人の主張に関する根拠を見つけることができる／複数の条件に応じて、複数の情報を検索し、選択できる ③反復処理を含むプログラムの実行結果を想定しながら修正できる ④不適切な情報を受信せずに、個人情報や著作権を保護しながら発信できる
レベル8 622点～669点	14.5	①全角・半角・英字・数字・記号などを使い分けて入力できる ②複数の条件に応じて、複数の情報を選択できる／目的に応じて、グラフを選択し、修正できる ③複数の条件分岐を含むプログラムを理解している／目的に応じて、フローチャートを考えることができる ④不適切な情報発信を指摘できる
レベル7 572点～622点	20.4	①ホームページ等を管理するためのアカウント権限を設定できる／ファイルサイズの削減などができる ②信頼できる根拠を選択できる／データの矛盾点を指摘できる ③目的に応じて、反復処理のプログラミングができる ④コンピューターウイルスの感染対策ができる／公開してはいけない記事の判断ができる
レベル6 524点～572点	21.9	①目的に応じて、アプリケーションを選択し、操作ができる ②目的に応じて、情報を整理することができる／複数の事象を示した図を読み解くことができる ③分岐処理のプログラムの実行結果を考えることができる／プログラムの不具合から修正すべき箇所を見つけることができる ④デジタル情報の発信にかかわる肖像権、著作権等の権利やそれらを守る方法を理解している
レベル5 480点～524点	17.4	①指定されたフォルダへファイルに名前をつけて保存できる／クラウド上の編集権限を設定できる ②目的に応じて、情報を図、表、グラフに示すことができる ③分岐処理のプログラムをフローチャートに表すことができる ④コンピューターウイルス感染の原因について理解している
レベル4 417点～480点	9.3	①指示に従って、アプリケーションを選択し、操作ができる ②複数のページに書かれている情報を要約できる ③簡単な分岐処理のプログラミングができる ④自分の情報を守ったり、健康に留意したりしながら情報端末を使うことができる

①は「基本的な操作等」、②は「問題解決・探究における情報活用」、③は「プログラミング」、④は「情報モラル・セキュリティ」の例。

注1) 調査を行った全生徒の平均点は500点に換算している。また、得点の上限や下限は存在しない。 注2) レベル9～1までの割合の合計を100%として計算している。
注3) 生徒の到達しているレベルより下のレベルの特徴は身につけていると考えられる。 ※文部科学省「情報活用能力調査 調査結果」（2023年3月）を基に編集部で作成。記載していないレベル3～1の割合は、次の通り。レベル3（381点～417点）：4.1%、レベル2（329点～381点）：1.8%、レベル1（329点未満）：0.9%。

図3 情報活用能力の育成に関する指導の状況

Q. 日々の指導の中で、情報活用能力の育成を図り、生徒にその力を発揮させることができていますか。



※『VIEW next』高校版 読者モニターアンケート結果より（アンケートは2025年7月にウェブで実施。有効回答数は115）。

情報活用能力を学校

2024年12月に文部科学大臣から中央教育審議会に諮問された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では、「生成AIをはじめデジタル技術が飛躍的に発展する中、小中高等学校を通じた情報活用能力の抜本的向上を図る方策についてどのように考えるか」と、「情報活用能力の抜本的向上」が学習指導要領の次期改訂に向けた論点の1つとして挙げられました。現行の学習指導要領でも情報活用能力の育成は求められており、各教科等の学びを支える基盤である情報活用能力は、高校においては情報科が中核となりつつも、各教科で育成すべき資質・能力、すなわち学校全体で育成すべき資質・能力とされています（図1）。しかし、生徒が情報活用能力を十分身につけているかという、そうとは言えないのが現状であり（図2）、現場の教師もうまく育成できていないと感じています（図3）。

そこで今号の特集では、情報活用能力の構成要素のうち、各教科の授業においても行われる「情報及び情報技術の活用」を中心に、どうすれば学校全体で情報活用能力を育成することができるのか、有識者の話と3校の事例を通じて考えています。また、同じく情報活用能力の構成要素の1つであり、社会問題としても注目されている情報モラルの指導のあり方について、有識者に話を聞きました。情報活用能力の全体像をつかむ点でも本特集をお役立ていただけたらと思います。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.6 課題整理

各教科等での情報活用能力の育成が、教科の学びの深化につながる

中京大学教養教育研究院 教授 泰山 裕

P.10 事例1 東京都・私立山崎学園富士見中学校高校

情報活用能力の指導状況の共有を出発点に、教科横断での指導の実現を目指す

P.14 事例2 三重県立名張青峰高校

心から取り組みたい探究課題の設定により、生徒に必要感を持たせ、情報活用能力を育む

P.18 事例3 兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校

多くの教科・科目が探究学習にかかわり、高度情報化社会に貢献する力を育む

P.22 Commentary

知識だけではトラブルは防げない。情報モラル指導の核心は「自分事化」

静岡大学教育学部 学校教育講座 准教授 塩田真吾

情 報活用能力は、「各教科等の学びを支える基盤」であり、「各教科等の特質に応じて、適切な学習場面で育成を図ることが重要」とされている（図1）が、生徒が身につけている情報活用能力の状況を見ると、十分に育成されているとは言い難い（図2）。

弊誌の読者モニターに情報活用能力の育成に関する指導の状況を聞いたところ、「育成を図ってはいるが、生徒

に発揮させるところまでは至っていない」と「育成を図りたいが、できていない」と答えた教師が8割を超えた（図3）。「育成を図りたいが、できていない」理由としては、「情報活用能力がどのような資質・能力なのかがあいまい」「学校全体として育成を目指す情報活用能力が明確にされていない」「担当教科・科目における指導が難しい」「情報科や他教科との連携が難しい」などが多く挙がった。

先生方とともに
考えたい「問い」

今後求められる情報活用能力とはどのような資質・能力なのか。どうすれば学校全体で育成できるのか。

各教科等での情報活用能力の育成が、教科の学びの深化につながる

中京大学教養教育研究院 教授

たいざん ゆう
泰山 裕

学習指導要領において、各教科等の学びを支える基盤と位置づけられている「情報活用能力」。その育成は、情報科だけが担うのではなく、学校全体で推進していくべきこととされている。そもそも情報活用能力とはどのような資質・能力なのか。どうすれば育成することができるのか。文部科学省が行う情報活用能力の調査研究などに携わる中京大学教養教育研究院の泰山裕教授に話を聞いた。

情報活用能力とは何か

学習の基盤となる
資質・能力の1つ

「情報活用能力」は、現行の学習指導要領において、「言語能力」や「問題発見・解決能力」等と並び、「学習の基盤となる資質・能力」に位置づけられ、文部科学省「高等学校学習指導要領平成30年告示」解説「総則編」では、「世の中のような事象を情報とその結びつきとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を

発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」と定義されています（P.4図1）。

情報活用能力の育成が重視される背景には、情報化社会の進展があります。特に生成AIはその進化が目覚ましく、そうした社会を生きていく上で、情報活用能力を身につけることは必要不可欠です。

変化の激しい予測困難な時代において、授業のあり方も変化しています。かつて主流だった講義型の授業では、



たいざん・ゆう 関西大学大学院総合情報学研究科博士課程後期課程修了。博士（情報学）。鳴門教育大学大学院准教授などを経て、2024年4月より現職。文部科学省「情報活用能力調査の今後の在り方に関する調査研究」企画推進委員、「学校DX戦略アドバイザー」なども務める。著書に、『思考ツール×ICT』で実現する探究的な学び』（編著、東洋館出版社）、『デジタル学習基盤と情報活用能力』（共著、東洋館出版社）など。

教師が情報を収集し、学習に適切な情報を選び、整理して生徒に提供していただきました。生徒は基本的に、教師から与えられた情報を正しいものとして受け取って学ぶ形です。しかし今は、生徒一人ひとりが持続可能な社会の創り手となるよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現が図られています。生徒が自分で課題を設定し、必要な情報を集めて、それを整理・分析し、理解したことをまとめる探究学習の存在感が増えています。そうした学びを支える基盤としても、情報活用能力の育成が求められています。

しかし、生徒に情報活用能力が十分に育成されているとはいえないのが現状です。2021年度に実施された「情報活用能力調査」の結果（P.4図2）では、情報活用能力が高い高校生（レベル8・9）の割合は約25%でした。私は、そのレベルは「情報の科学的な理解に基づき、実生活や社会で問題を解決できる」レベルだと捉えており、高校生が日々接する情報の量や質を考えると、そのレベルの高校生が増えることが望ましいと考えています。

情報技術の活用状況も芳しくありません。「OECD生徒の学習到達度調査（PIISA）2022」の結果では、GIGAスクール構想の実施以降の調

査にもかかわらず、探究的な学びにおけるICTの活用頻度において、日本は参加29か国中最下位でした。

体系的な情報活用能力の育成について中教審で議論が進行

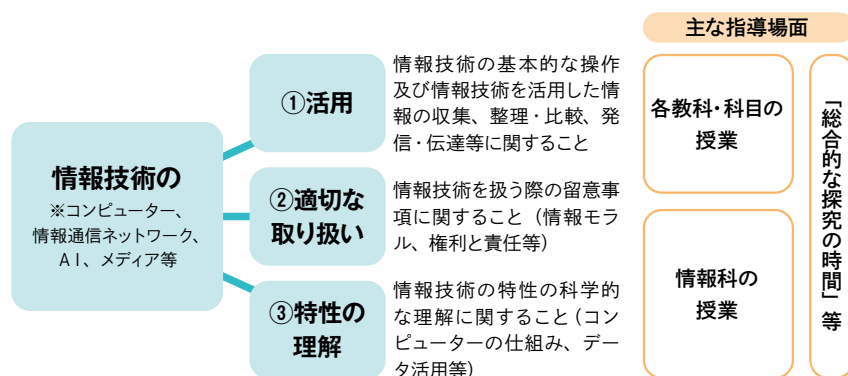
現在、学習指導要領の次期改訂に向けた議論が中央教育審議会（以下、中教審）で進行中です。その論点の1つが「情報活用能力」であり、前述のような状況を踏まえて、小・中・高を通じた体系的な育成の必要性が議論されています。具体的には、小学校は情報活用能力を育成する時間を確保し、中学校は技術科を独立させ、そこで技術の視点から情報について学ぶ時間を確保し、高校はそれらの検討を踏まえて情報科の内容を深めていく案が出ています。情報活用能力の定義も見直されようとしています。現在、情報活用能力は

なぜ、学校全体での育成が必要か

多くの教科等で指導されている情報収集、整理、分析、表現、発信では、情報活用能力はどうすれば育

「情報及び情報技術を」活用する力とされていますが、デジタル技術の普及やGIGAスクール構想の進展等に基づき、「情報技術を介さない情報活用については具体的なイメージが持ちにくい」「言語能力との重複がある」との指摘を踏まえ、情報活用能力を「情報技術」にかかわるものに焦点化し（「情報の活用」は各教科等の特質に応じて指導）、その上で情報活用能力の構成要素を3つに整理することが検討されています（図1）。併せて、情報活用能力を、各教科等のみならず、探究的な学びを支え、駆動させる基盤として位置づけることも提案されています。最終的にどのように整理されるのか、議論を注視しています。

図1 中央教育審議会での検討中の情報活用能力の定義



※中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会（第7回）論点資料⑥「情報活用能力の抜本的向上（デジタル化社会の負の側面への対応を含む）」（2025年5月）を基に編集部で作成。「主な指導場面」は取材を基に編集部が加筆。

成することができるのでしょうか。「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」にも示されている通り（P.4図1）、情報活用能力は情報科が

中核を担いながらも、各教科・科目で生徒に育成し、発揮させることが求められています。中教審で検討中の図1に照らし合わせれば、「①活用」における情報技術の基本的な操作や、情報技術を活用した情報の収集、整理・比較、発信・伝達等は、各教科・科目の授業

で行えます。「②適切な取り扱いや」③特性の理解」は、知っていると効率的・効果的に情報を活用できる、あるいは知らないで困る・トラブルに巻き込まれるというものです。主に情報科で体系的に指導し、そこで学んだ知識・技能を生徒が発揮する場面を各教科・科目の授業や「総合的な探究の時間」に設けることが求められます。①、②、③の各要素の関係については、情報技術を自由自在に活用し、自らの人生や社会のために課題解決や探究ができる力がこれからの時代を生きる上で不可欠であることから、「①活用」を情報活用能力の中核的な構成要素と整理する案が出されています。

しかし先生方からは、「情報科以外の教科等での情報活用能力の育成がイメージしにくい」といった声を伺います。そこでまずは、「①活用」を各教科等どのように指導していけばよいのかについて考えたいと思います。

図2は、現行の学習指導要領で定義されている情報活用能力の要素が資質・能力の3つの柱で分類・例示されたものです。その中には、先生方が現在の自身の授業で指導している事項が複数あるのではないのでしょうか。実際、私が行った共同研究では、各教科等の学習指導要領本文の記述と情報活用能

図2 情報活用能力の要素の分類・例示

A 知識 及び 技能	1 情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能	①情報技術に関する技能 ②情報と情報技術の特性の理解 ③記号の組み合わせ方の理解
	2 問題解決・探究における情報活用の方法の理解	①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ②情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解
	3 情報モラル・情報セキュリティなどについての理解	①情報技術の役割・影響の理解 ②情報モラル・情報セキュリティの理解
B 思考力、 判断力、 表現力 等	1 問題解決・探究における情報を活用する力（プログラミング的思考・情報モラル・情報セキュリティを含む）	事象を情報とその結びつきの視点から捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決し、自分の考えを形成していく力 ①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力 ②新たな意味や価値を創造する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力 ④自らの情報活用を評価・改善する力 等
C 学びに 向かう力、 人間性等	1 問題解決・探究における情報活用の態度	①多角的に情報を検討しようとする態度 ②試行錯誤し、計画や改善しようとする態度
	2 情報モラル・情報セキュリティなどについての態度	①責任を持って適切に情報を扱おうとする態度 ②情報社会に参画しようとする態度

※文部科学省「学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力の育成」を基に編集部で作成。

図3 各教科等の学習内容と対応づけられる情報活用能力の項目

泰山教授は、図2の分類表とその下位項目を基にして、情報活用能力に対応する文言が各教科等の学習指導要領の本文中にいくつあるかをカウントした。

●校種別 各教科等の学習指導要領と対応づけられる情報活用能力の項目の数

	A-1-①	A-1-②	A-1-③	A-2-①	A-2-②	A-3-①	A-3-②	B	C-1-①	C-1-②	C-2-①	C-2-②
小学校	10	20	15	935	155	15	23	147	299	129	24	13
中学校	5	28	14	587	110	7	27	85	156	126	6	2
高校	16	148	35	1709	391	34	63	276	551	423	89	10

●各教科等と対応づけられるものが多かった情報活用能力の項目

A-2-① 情報収集、整理、分析、表現、発信の理解

- ・課題設定、調査の設計計画：理科、保健体育
- ・情報収集：地理歴史、公民
- ・整理、分析：国語「情報と情報の関係の理解」、数学「データ活用」の領域
- ・表現方法：芸術（音楽、美術、書道）
- ・学習過程の振り返り：保健体育
- ・一連の発揮：総合的な探究の時間

※泰山教授提供資料を基に編集部で作成。研究の詳細は、泰山裕・堀田龍也（2020）「各教科等で指導可能な情報活用能力とその各教科等相互の関連～平成29・30年改訂学習指導要領の分析から～」を参照。

力の対応が多く見られることが分かりました（図3）。最も多かったのは、「情報収集、整理、分析、表現、発信の理解」でした。例えば、理科や保健体育では課題を設定して計画を立てる場面は少なくないですし、国語では情報と情報の関係を理解し、その関係づけの仕方を学ぶといったことを指導されていると思います。

つまり、情報活用能力の育成において

で求められているのは、単純に新しい指導を加えるということではなく、これまでの授業を「情報活用能力」の育成の視点で捉え直し、その視点をより意識して授業を行うことなのです。

情報活用場面を共有し、教科を超えた指導に生かす

情報活用能力を学校全体で計画的に

育成する第一歩として効果的なのは、各教科・科目における情報活用場面を全体で見える化し、共有することで。それにより、教科間で共通する活用場面に気づいたり、各教科・科目の活用の特徴を知ることができたりします。見える化したものを情報活用能力の分類表（図2）と照らし合わせれば、どの教科でも指導していない要素が明らかになるかもしれません。そうした

取り組みは、カリキュラム・マネジメントの推進にもつながります。

そして、授業や探究学習では、「国語で分析した方法と同じだね」「理科で学んだ情報収集の方法を使ってみよう」などと、生徒に声かけができます。生徒は各教科・科目で学んだことを結びつけ、教科・科目の枠を超えて総合的に情報活用能力を発揮できるようにするでしょう。そうした生徒の育成こそ、学校の重要な役割だと考えます。

各教科・科目における情報活用場の面の共有は、表計算ソフトで枠組みを作成し、クラウドにアップして、各教師が入力する方法がお勧めです。例えば、「情報収集・整理・分析・表現・発信」について、活用した情報技術や該当する活動内容を入力します。計画ではなく、実際に取り組んだ活動を随時入力する形であれば、先生方の負担も少ないでしょう。そうして蓄積された情報や情報技術の活用場面を、学期末や年度末の校内研修などで整理・体系化し、明らかにした課題を次年度のカリキュラムにつなげていきます。

情報活用能力が高まれば、それが教科の学びを深める資質・能力として発揮され、結果的に先生方が本来目指している教科の本質をより深く探究できる授業に近づいていくと思います。

失敗から学びながら情報活用能力は身につく

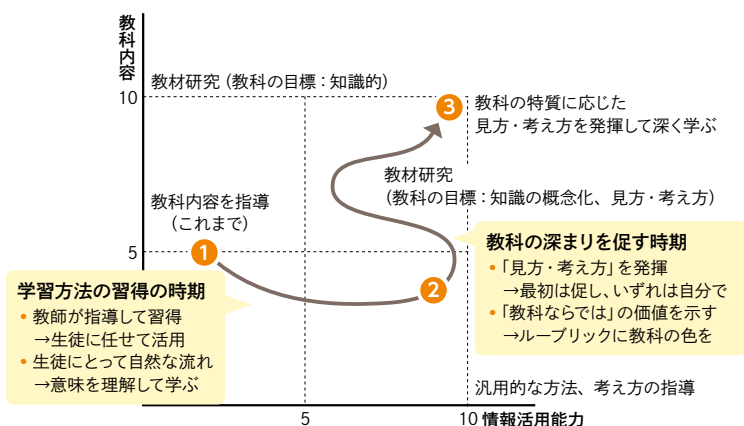
情報活用能力の育成を目的とした授業を行う時期も必要

情報活用能力は、スポーツなどと同様に、知識や技能を学んだからといって、すぐに成果を発揮できるものではありません。教科の学びや実際の生活の中で情報活用能力を発揮すればするほど磨かれていきます。だからこそ、各教科・科目の授業において、何度も情報活用的一面を設けることが大切なのです。

生徒が十分に情報を活用できない場合は、それを成長の過程と捉え、試行錯誤を見守る姿勢が教師には求められます。授業の中に意図的に失敗から学ぶ機会を設けることも有効です。例えば、安易に「コピー＆ペーストをした生徒に対しては、意見の根拠を問いたです」とで「考えざるを得ない状況」をつくり出します。

情報活用能力の高まりに比例して、教科の学びが深まることを期待したいところですが、いろいろな学校を見ていると、

図4 情報活用能力の育成に伴う教科の学びの深まりのイメージ



※泰山教授提供資料を基に編集部で作成。

生徒が自分で情報を活用しながら学ぶ
でいくためには、情報の収集や整理の
仕方などを学んだり、練習したりする
など、情報活用能力そのものを鍛える
時期が必要だと感じます。そうした時
期には教科の学びも深まるとは限りま
せん。しかし、その時期を経ることで、
生徒が自ら学び、教科の学びが深まっ

試行錯誤や失敗を許容する学校文化に

ていくという**図4**のようなイメージを
持っていたかとよいと思います。

学校全体で情報活用能力の育成を推進するためには、まずは全教科・科目で育成する資質・能力であることを目標合わせしましょう。そして、教師も指導方法を試行錯誤できるよう、失敗を許容する学校文化を大切にしてほしいと思います。

中教審の答申(＊)で述べられているように、「教師の学びの姿も、子どもたちの学びの相似形」です。先生方自身も情報活用能力の向上に取り組みましよう。これまで行ってきた情報収集、整理・分析に基づく授業づくりに加えて、先生方同士でチャットを用いた情報共有や、クラウド上での共同編集などを行うことで、生徒が情報技術を活用して学ぶ場面をイメージしやすくなります。教師と生徒が同じプラットフォームを使えば、授業づくりそのものが教師のICT研修にもなります。

管理職の先生方にはそうした取り組みを推奨し、学校全体で情報活用能力の育成を進めていただきたいと思います。

* 中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』（2022年12月）。

情報活用能力の指導状況の共有を出発点に、教科横断での指導の実現を目指す

東京都・私立山崎学園富士見中学校高校

探究学習において生徒の情報収集が限定的であることに課題意識を持ち、学校全体で情報活用能力を育成する必要性を感じていた東京都・私立山崎学園富士見中学校高校。まずは各教科・科目の指導状況を見える化するために、「情報活用能力指導状況記入シート」を作成。同シートを通じて、各教科・科目の実践内容を共有し、担当教科・科目の指導の見直しにつなげている。また、授業づくりを司書教諭と連携して行い、生徒が信頼性の高い情報を収集し、活用するよう、支援している。

注目ポイント

- ✓「情報活用能力指導状況記入シート」で各教科・科目の実践内容を見える化して共有
- ✓「公共」の授業では、平和をテーマにした意見文の作成過程で様々な情報活用の場面を設定
- ✓高校3年生が探究学習で作成した論文の英文要約において、生成AIを補助的に活用

自校が育成を目指す「情報活用能力」
信頼性の高い情報を収集し、活用する力を育む

東京都・私立山崎学園富士見中学校高校は、中高一貫教育を行う女子校だ。2017年度、探究学習のカリキュラムの作成にあたり、探究委員会（現・教育研究部）を設置して、自校で育成を目指す資質・能力を検討し、「自分の意見を形成する力」「聴く力」など、「17の力」（図1）を策定した（*1）。そのうちの1つが、「様々な情報を収集し、必要な情報を選択する力」と定義された「情報を活用する力」だ。善本久子校長は、「17の力」を設定

してから8年経った今、「情報を活用する力」を育成する重要性はますます高まっていると指摘する。

「物事を調べることに手間も時間もかかっていた時代は、人が知識を記憶していることには価値がありました。しかし、情報技術の発達により、物事はインターネットで調べればすぐに分かる時代になりました。そうした時代に求められるのは、知識を組み合わせる思考し、0から1を生み出す『創造』です。種類も質も様々な情報があふれる中で、複数の情報源から信頼性の高い情報を収集し、それを正しく活用する力を育むことが、これからの学校教育では一層重要だと考えています」

図1 富士見で育む「17の力」

自分と向き合う力

- ①自分の意見を形成する力
- ②チャレンジする力
- ③計画を立てる力
- ④やり遂げる力
- ⑤自らを振り返る力

人と向き合う力

- ⑥聴く力
- ⑦人を巻き込む力
- ⑧人とつながる力
- ⑨話し合う力
- ⑩発表する力
- ⑪記述する力

課題と向き合う力

- ⑫課題を発見する力
- ⑬情報を活用する力
- ⑭多角的に考える力
- ⑮論理的に考える力
- ⑯創造する力
- ⑰社会に貢献しようとする力

下線は、図2の「指導場面」でひもづけられている資質・能力。
※学校資料を基に編集部で作成。下線は編集部によるもの。

学校全体の取り組み

生徒の情報収集が限定的である現状を共有し、課題意識を高める17年度に探究学習のカリキュラム作成に着手し、実践を進めてきた同校だが、探究学習のみで「17の力」を育成するのは難しいことに気づいたと、教育研究部主任の三浦佳奈先生は語る。「週1時間の探究学習だけでは、目標とする到達レベルの力を育むことは難しく、様々な教育活動の中で日常的

* 1 同校の探究学習に関する取り組みは、本誌2019年度12月号の「改革事例から導く！『学校教育デザイン』を描く道標」のコーナーで紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」(https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article04653/)、または右の2次元コードからアクセスしてください。



情報活用能力を学校全体でどう育成するか？

に育成する必要性を感じました。中でも情報活用能力は、各教科・科目の授業で育成できるため、情報活用場面を意識的に設けるようにすることを校内で共有しました」

しかし、生徒の情報活用能力は、思うようにには高まらなかった。司書教諭



校長
善本 久子
よしもと ひろこ
同校に赴任して2年目。



教育研究部副主任
三浦 佳奈
みつら かな
同校に赴任して19年目。
社会科。



教育研究部副主任
宗 愛子
そう あいこ
同校に赴任して10年目。
司書教諭。

学校概要

設立 1940（昭和15）年
形態 全日制／普通科／女子校
生徒数 1学年約240人
2024年度卒業生進路実績 国立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京科学大、東京農工大、横浜国立大、名古屋大、東京都立大などに31人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ766人が合格。専門学校進学1人。

として情報活用能力の育成に携わってきた教育研究部副主任の宗愛子先生には、次のような課題意識があった。

「卒業生が探究学習の中で作成した論文の参考文献を示すことで、書籍や新聞、研究論文など、多様な情報源があることを伝えるなど、情報収集の方法は中学1年次から継続的に指導してきました。しかし、インターネット上で必要な情報が見つからなければ、それ以上は調べようという生徒が少なくありませんでした。情報源の違いによって、調べ方も、得られる知見も変わるから、多様なメディアを主体的に活用する力の育成が不可欠でした」

そこで24年5月、教育研究部は職員会議で、学校全体で情報活用能力を育成する方針を改めて発信。各教科・科目における情報活用能力の指導状況を見える化して共有することを提案した。具体的にはまず、情報活用能力とは、探究のプロセスを支える汎用的なスキルであり、かつ、各教科・科目の学びを支える基盤であることを、具体的な授業場面を通じて改めて説明。そして、表計算ソフトで作成した「情報活用能力指導状況記入シート」（以下、シート）をクラウドにアップし、各教師が指導した項目を入力するようになった。

しかし、そのシートでは各教科・科

図2 「情報活用能力指導状況記入シート」(抜粋)

指導場面			(1) 問いを立てる (テーマは何ですか。どのような指導をしていますか)	(2) 情報を集める (どのような資料をどのような方法で集めていますか。どのような指導をしていますか)	(3) 情報を整理・分析する (どのように整理・構造化させていますか。どのような方法・観点で比較・評価させていますか)	(4) 表現・発信する (どのような表現活動を取り入れていますか)
「17の力」で該当する力			⑫課題を発見する力	⑬情報を活用する力	⑭多角的に考える力、 ⑮論理的に考える力	①自分の意見を形成する力、 ⑩発表する力、⑪記述する力
入力例			例：〇〇を課題に設定し、マッピングさせ、それを基にグループで探究する問いを選び、仮説を立てさせた。	例：教科書、気象庁のウェブサイト、新聞記事、地域の防災パンフレットなどを紹介し、情報カードに書くよう、指導した。	例：主食が異なる2か国を選ばせ、地理と気候の観点で比較させた／ウェブ記事と新聞記事の情報の信頼性を比較させた。	例：提案をスライドにまとめ、グループで発表させた。意見文も個人で提出させた。
活用する手法・資料等の例			手法例：ブレンストーミング／マッピング（5W1H・Qワードなど）／ハテナソノ／マングラート	資料例：教科書・資料集／辞典・事典／本／新聞（紙）／雑誌（紙）／論文／行政資料／白書／パンフレット類／統計／データベース	思考ツール例：マトリックス／分類／比較対照／原因と結果／影響／対策／連鎖／時系列変化	表現活動例：ポスター、スライド、新聞、動画／掲示、プレゼンテーション、ワールドカフェ形式／演劇
学年	教科・科目	単元名	4つの地域の担当を割り振り、各国の気候変動に関する「現状の課題」と「解決策」を教科書から読み取らせた。（6月）	教科書の内容に加え、インターネットで各国のデータを調べさせた。（6月）	「現状の課題」と「解決策」の2つの視点で情報を整理して、スライドにまとめさせた。（6月）	それぞれの地域を担当した4人を1つのグループにし、「現状の課題」と「解決策」を英語で説明させた。（6月）
高1	英語コミュニケーション Bグレード	We can make a difference				
高2	公共	「正しさ」を考える一私たちの価値観と選択		グループごとに割り振った社会問題（ヘイトスピーチの罰則化、選択的夫婦別姓の法制化、同性婚の法制化）に関する資料（新聞記事、書籍など）を配布し、その問題の現状や論点などを情報カードに書かせた。（5月）	授業で学んだ功利主義、義務論、ロールズの正義論、ミルの自由論の4つの視点で社会問題を分析させた。（5月）	グラフィックオーガナイザーを使ってまとめ、その内容を基に発表させた。（6月）
高2	家庭基礎	家族に関する法律		選択的夫婦別姓制度の導入に関する日本や海外の現状について、教科書・新聞記事・インターネットを用いて情報収集をさせた。（5月）	正確な数値を用いて、整理させた。（5月）	3人1組でマイクロディベートを行った。全員が賛成・反対・審判のすべての役を担うことで、それぞれの立場で考えられるようにした。（5月）

※学校資料を基に編集部で作成。同校のシートは学年ごとに分かれているが、ここではまとめて例示している。

目での具体的な指導内容までは把握できなかった。

そこで25年度はシートを改訂。(1)問いを立てる、(2)情報を集める、(3)情報を整理・分析する、(4)表現・発信するという探究のプロセスごとに指導内容を入力する形とし、各指導場面で育成したい力を「17の力」(P.10図1の下線)とひもづけて示した。記入例も充実させ、6月の職員会議で、授業での実践を入力してほしいと依頼した。

そして7月中旬、各教師が入力した指導の状況を、宗先生が学年ごとに教科・科目順に並べ換えて校内で共有(P.11図2)。7月末の各教科会では、それを基に情報活用能力の育成について話し合うことにした。三浦先生が担当する社会科では、各学年の実践を見ながら話し合った。

「他の教師の入力内容を見て、『自分もこんな実践をした』、『2学期にこういう実践をしたい』といった話が出ました。『社会科では地図や写真、データなど、様々な形態の情報を扱うのだから、情報活用能力を今以上に育成していけるはずだ』と確認しました(三浦先生) 教師の意識が情報活用能力の育成に向き始めたのは、職員会議で生徒の現状を共有したことが大きかったと、宗先生は語る。

「職員会議では、検索サイトでの検索結果の上位に表示される生成AIの要約をそのまま書き写す生徒が少なくない状況を取り上げ、学校全体で情報活用能力の育成を強化する必要がある、そのための第一歩として、各教科・科目での指導を見える化したいと伝えました。先生方も授業の中で同じような場面を目にしていたので、提案への共感を得られたのだと思います」

三浦先生も、目的を共有できたことが取り組みの推進力になったと語る。

「生徒の現状を共通の認識としたことで、学校全体として情報活用能力の指導をレベルアップする必要性を確認できました。さらに、シートの活用が、情報活用能力を教師間の共通言語にすることに繋がりました」

教科・科目の指導事例 「公共」

意見文の作成の過程に、 情報活用場面を組み込む

三浦先生が担当する高校2年次の「公共」では、沖縄とパレスチナの現状を学んだ上で、平和をテーマに自分で問いをつくり、その問いを考えるための情報を収集・整理して新聞に投稿する意見文を書くというプロジェクト型学習の授業を行った(図3)。

図3 高校2年次「公共」「私たちの声を伝えよう! 沖縄とパレスチナから考える平和」指導案(全15時間)

- ねらい
 - ・社会の課題を明らかにする
 - ・複数のメディアから信頼性の高い情報を収集する
 - ・発信する責任を意識する
- 学習の流れ
 - ① 沖縄とパレスチナの現状を知る
 - ② 「平和」をテーマに問いをつくる
 - ③ 情報を収集する
 - ④ 情報を整理・分析する
 - ⑤ 意見文を作成して発信する(新聞社に投稿)

※意見文の文字数: 宗先生が作成した各新聞社の特徴をまとめた資料を読んだ上で、生徒が各自、投稿する新聞社を決め、その新聞社の投稿欄の制限字数を意見文の文字数とした。

■授業計画

時数	学習内容
1・2	沖縄の現状
3	日米安全保障体制
4・5	パレスチナ問題
6	グループワーク(戦争と平和を倫理学の視点で考え、話し合う)
7	個人ワーク(平和をテーマに問いづくり、情報収集)
8・9	日本の平和主義
10	個人ワーク(情報の整理・分析、意見文の作成)
11	国際社会と国際法
12・13	国際連合
14	意見文を読み合い、フィードバックし合う
15	意見文完成・提出

※学校資料を基に編集部で作成。



写真1 生徒は、インターネットや書籍など、様々なメディアを活用して、自分が立てた問いについて調べた。

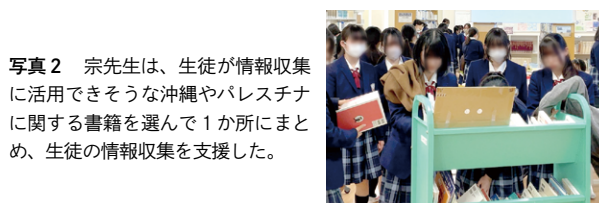


写真2 宗先生は、生徒が情報収集に活用できそうな沖縄やパレスチナに関する書籍を選んで1か所にまとめ、生徒の情報収集を支援した。



写真3 宗先生は、掲載された新聞記事の切り抜きを掲示。それを見て、自分も投稿しようとする生徒もいる。

授業開始の約3か月前から宗先生に相談し、指導の流れや教材・資料を協働して作成した。戦争と平和を題材にした理由を、三浦先生はこう説明する。

「戦時下では情報は統制されるものであり、平和を考える上で情報活用は重要な意味を持つと考えました。生徒は普段、SNSを使って情報収集をしています。そこで授業では、書籍や新聞など、SNSとは違うメディアで情報を収集する場面を設定しました。平和について考えてほしかったのはもちろんですが、真摯な姿勢や倫理観が求められるテーマにすることで、生徒が信頼性の高い情報を収集しなければならぬ必要性を強く意識することを期待しました。実際、多くの生徒が書籍や新聞から情報を得ていました」

生徒がすぐに書籍を探したり、新聞のデータベースを検索したりすることができるよう、授業は「Learning Hub」(*2)で実施(写真1)。また、活用できそうな書籍を宗先生が数十冊選んだり、信頼性の高いウェブサイトの一覧を作成したりして、生徒の情報収集を支援した(写真2)。

情報源にした資料は、生徒それぞれがクラウドの記録シートに入力。学習評価の際、意見文の内容と情報源にした資料を照らし合わせることで情報活

用の状況を推測し、評価した。

意見文の投稿を単元目標としたのは、SNSを中心に無責任な発信が社会問題になっている中で、採用されれば名前が掲載される新聞への投稿を通じて、発信には責任を伴うことを経験させたいと考えたからだ。投稿は生徒の任意だが、毎年数人が新聞に掲載されている(写真3)。授業後も投稿を続ける生徒もいるという。

今後の課題は、収集した情報を整理・分析する時間の確保だ。

「単元の最初には、主に講義を通じて戦争の事実を伝えます。生徒が初めて知る衝撃的な内容も多く、講義を踏まえて『問いを立てる』ことに多くの時間をかけているのが現状です。収集した情報を整理・分析し、より深い意見文を書けるような指導ができるよう、単元の指導計画も見直していきたいと思っています」(三浦先生)

生成AIの活用

生成AIを補助的に使い、探究学習の論文を英語で要約

25年度は、高校3年生が探究学習で作成した論文を英語で要約する活動において、補助的に生成AIを活用した。具体的には、生徒自身が英語で要約を

書いた上で、うまく書けなかった部分や表現が気になった部分の日本語の文章を生成AIに入力し、生成AIが作成した英文を参考に生徒が修正するという手順だ。生徒が一度自分で英文を書いているからこそ、生成AIが作成したよりよい英語表現が自分のものとなり、英語力の向上につながった。

授業での生成AIの活用にあたり、5月、高校3年生を対象に、生成AIの活用の利点とリスク、ルールをテーマに、外部講師による講演会を実施。教師に対しては5月に2回、生成AIの活用体験会を開き、生成AIの活用が未経験の教師に、生成AIで何ができるのかを体験してもらった。その上で、8月末には全教師を対象に、生成AIが浸透した時代に生徒に育むべき資質・能力や授業づくりをテーマとした校内研修を実施した。

成果と展望

年度末に各教師の実践を整理し、教科横断での指導につなげる

「情報活用能力指導状況記入シート」への入力は、2学期以降も継続する。9月の職員会議では、7月の各教科会で話した内容を共有して2学期での実践につなげ、さらに年度末には、学年

別・教科別に整理した内容を全教師で共有する予定だ。そうした取り組みを通じて教科・科目間に共通する指導の観点を見いだし、将来的には教科横断的な授業の実践へと発展させたいと、三浦先生は考えている。

「シートから、『家庭基礎』と『公共』が同時期に選択的夫婦別姓制度について扱っていたことがわかりました(P.11図2)。今後は教科横断のテーマを設定し、それぞれの教科ならではの視点を通じて、情報活用能力もより効果的に育成できればと思っています」

宗先生は、生徒が各教科・科目で学んだことを探究学習での学びに生かしているよう、教師が教科・科目を超えて学びをつなぐことを一層大切にしたいと語る。

「『この前、あの教科で学んだね』といった声かけを教師全員が行うことで、学校全体で情報活用能力を育成していきたいと思っています」

善本校長は、自らの役割をこう語る。「管理職には5年先、10年先の本校や社会を見据えた上で、今必要な教育を示すことが求められます。その観点から、情報活用能力はこれからの社会を生きる上で不可欠な力であると確信しており、今後も自信を持って取り組みを推進していきたいと考えています」

*2 同校は、学校図書館を様々な学びの中核となる施設・設備と位置づけ、「Learning Hub」と呼んでいる。

心から取り組みたい探究課題の設定により、生徒に必要感を持たせ、情報活用能力を育む

三重県立名張青峰高校

2016年4月に2校が統合して開校した三重県立名張青峰高校は、情報活用能力の育成をグラデュエーション・ポリシーの1つに掲げている。その実現に向けて、探究学習において、生徒自身が心から取り組みたいと思った課題を設定することで、主体的に情報を集めて探究しようとする姿勢が醸成されるカリキュラムを構築。各教科・科目においても、情報活用能力の育成を意識した授業を行うことで、探究学習をよりよい取り組みにすることを目指している。

注目ポイント

- ✓ 生徒が心から探究したい課題を設定させて、各教科・科目の学習とのつながりを実感させる
- ✓ 各教科・科目の学習内容と社会課題を結びつけ、情報活用能力を育成する場面を設定
- ✓ 生徒が探究学習を深めるための補助として、心得などを整備した上で生成AIを活用

自校が育成を目指す「情報活用能力」
生徒が立てた目標の実現に向け、
情報を活用する力を育む

三重県立名張青峰高校は、同名張西高校と同名張桔梗丘高校が統合して2016年4月に開校した。グラデュエーション・ポリシーとして「学力と社会への参画力をともに備え、新時代をたくましく生き抜く生徒」の育成を掲げ、そのために3つの資質・能力を育むこととした。そのうちの1つが「グローバルな視点で意思決定・意思疎通を行い、情報を活用できる力」だ(図1)。その実現のためのツールの1つとして、全生徒にChromebookを配

布し、全教科・科目の授業で活用している。情報科の向山明佳先生は、次のように説明する。

「生徒が探究学習で取り組む課題に対して、一人ひとりが持つ『やってみたい』『成し遂げたい』という思いを実現するために、ICTをツールとして使いこなしながら、必要な情報を調べ、整理し、活用していく、それが本校が目指す情報活用能力の核心です」
情報活用能力を身につけ、それを発揮する経験を積むことで、社会に出てからグローバルに活躍するとともに、地域などの身近な課題も自分事として捉え、取り組もうとする力を育成したいと考えている。

図1 名張青峰高校のグラデュエーション・ポリシー

学力と社会への参画力をともに備え、新時代をたくましく生き抜く生徒

- 育む3つの力
- 未来を拓く力「自立」
自己実現・進路実現を図ることができる力
 - グローバル社会で活躍する力「創造」
グローバルな視点で意思決定・意思疎通を行い、情報を利活用できる力
 - 人とつながる力「共生」
相互に理解し合えるコミュニケーション力、社会に参画できる力

※学校資料を基に編集部で作成。

「そのためには、探究する課題を自分で設定し、仮説を立ててそれを検証し、成果や課題を整理して改善や解決をするサイクルを何度も経験するとともに、その過程を自分の言葉で論理立てて伝えられることが求められます。そうした情報活用能力を育む学習プロセスを重視しています」(向山先生)

学校概要

設立 2016（平成28）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約240人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、北見工大、三重大、奈良教育大、静岡県立大、愛知県立大、奈良県立大などに10人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、京都産業大、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、甲南大などに延べ611人が合格。



小林史典
 1学年担任
 こばやし・ちかのり
 同校に赴任して4年目。
 理科（物理）。



向山明佳
 教務部
 むかいやま・あきよし
 同校に赴任して9年目。
 情報科。



辻井伸文
 教頭
 つじい・のぶふみ
 同校に赴任して1年目。



水守智士
 校長
 みずもり・さとし
 同校に赴任して3年目。

学校全体の取り組み

教科学習と探究学習の両輪で情報活用能力を育む

同校は情報活用能力を、探究学習と各教科・科目の学習を通して育成することを目指している。探究学習では、生徒は自分が心から取り組みたいと思った課題を設定すると、それを探究するために必要な情報を主体的に集め、整理し、活用しようとする。そのプロセスで必要となる情報活用能力を各教科・科目の授業でも育成しようという考えだ。

「ある程度の知識や経験がなければ、自分が何に興味・関心があるのか、どのようなことが課題なのかといったことに気づきにくいものです。しかし、高校入学時点で自分は何を学びたいのかが分かっている生徒は少ないのが現状です。そこで、探究学習がすべての学びの中心となり、学校で学ぶ楽しさやワクワクする気持ちを生徒が持てるようなカリキュラムにしました」（向山先生）

具体的には、1年次はSDGsや地域に関する課題を設定して探究学習の基本的な進め方を身につけ、2・3年次は自分の興味・関心に応じた課題を設定して主体的に探究学習に取り組み

るカリキュラムにした。

「生徒には、『自分が興味・関心を持てる課題を設定して取り組もう』と繰り返し伝えていきます。最初は、生徒から『こんな課題を設定してもいいの？』などと戸惑いの声が上がりますが、探究学習においては自由に考えてよいことを複数の教師が繰り返し話すため、自分の興味・関心や身近な問題に基づく課題を設定して、夢中になって探究学習に取り組む生徒が少なくありません」（向山先生）

元々関心を持っていた地域課題に取り組む生徒もいれば、プログラミングの学習で習得した知識を生かして自動黒板消し器を製作する生徒もいて、思い思いの探究学習に取り組む生徒の姿が見られている。

そのように探究学習に取り組む中で、各教科・科目で身につけた情報活用能力を探究学習で発揮する生徒が現れ始めた。

ある生徒は、市内にある景勝地の滝に訪れる観光客を増やすことを課題に設定した。観光客のニーズを把握するためのアンケート調査を実施する際、情報科の授業で学んだ調査票の作成方法を思い出し、その分野を学び直した上でアンケートを作成。調査結果の集計においても、情報科で学習したこと

を生かしたという。

探究学習に取り組む中で何かの問題に直面した際には、各教科・科目で学習したことを復習し、その問題の解決に生かす。そうした経験を通して情報活用能力を始めとする資質・能力が高まるようにしている。

教科・科目の指導事例①「物理」

原子力発電の是非をテーマにディベートを実施

各教科・科目の授業においても、情報活用能力を発揮させる場面を設けるようにしている。辻井伸文教頭は次のように説明する。

「例えば、理科では実験結果の分析や考察、家庭科では調理実習の作業内容の整理や計画などが、情報活用能力が発揮される場面にあたります。さらに、単元全体を貫く探究的な課題を設定して、授業を通して身につけた知識・技能を基に、生徒が自分で調べて整理した情報を活用しながらその課題に取り組む授業も行っています」

具体的な実践として、3年次の「物理」の授業を紹介する。

物理担当の小林史典先生は、「原子の構造とエネルギー」の単元の授業で、「原子力発電は是か非か」をテーマに

ディベートを行った。そのねらいは、生徒が自分の考えだけにとらわれず、様々な情報を収集し、それを整理・分析することで、客観的に物事を捉える力を身につけることだ。

「原子力発電の是非を物理の視点で考えると、技術的な説明を踏まえた主張になりますが、ほかにも、倫理観や経済性、リスク管理など、様々な視点を持つ必要があります。生徒にはディベートの準備をする段階で、原子力発電の歴史やこれまでに社会で議論されたことなど、様々な視点で情報を集め、メリットやデメリットを洗い出した上でチームの意見をまとめるよう、指導しました」

生徒は授業で学習したことや自分たちで調べた情報を整理した上で、原子力発電が環境に与える影響や安全性、経済性などについて分析し、その結果をスライドにまとめた。そして、賛成・反対それぞれの意見を、根拠を示しながら論理的に意見を主張した（写真）。

「ディベートの準備をする過程において、必要な情報を自分で探し、評価し、活用して発表する力を身につけることができますし、原子力発電に関して興味・関心があれば、それを探究学習の課題の設定にも生かすことができます。また、教科・科目の学習内容と



写真 賛成・反対のそれぞれの立場から、原子力発電の是非について議論。社会課題を自分事として捉え、調査結果や学習内容を基に、論理的に意見を組み立てる姿が見られた。

て分析し、その結果を基に、実際に容器を製作して実験しました。卵が割れない容器を設計して製作することはとても難しいのですが、失敗からの学びこそが科学の原点だと考え、粘り強く取り組みました」（小林先生）

教科・科目の指導事例② 「情報Ⅰ」 実物に触れ、五感で得られる 情報も大切にする

情報科を担当する向山先生は、授業の最後の3分間を「疑問タイム」とし、生徒が授業の中で疑問に思ったことを聞き取っている。例えば、生成AIを題材にした授業の時には、「人間が生成AIに支配される未来は来るのか」「生成AIは感情を持つのか」といった疑問が生徒から寄せられた。向山先生は、それらの疑問を基に次時の授業を設計している。

『疑問タイム』を続けたところ、生徒から寄せられる疑問は、回を重ねるごとに量が増え、質が高まりました（向山先生）

「疑問タイム」で寄せられた疑問は1年間で1万個以上に上る。向山先生は、それらの内容を基に生徒の理解度を把握して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料にしたり、次時の授業設計や授業改善に活用したりしている。

生成AIなどの情報技術が進化し続ける社会だからこそ、実物に触れる経験も大切にしている。

「例えば、市内に点在する古墳群に生徒が足を運ぶと、写真を見ても実感できないその大きさに驚きます。生徒はインターネットで調べただけで物事が分かったつもりになってしまいがちです。デジタル端末に表示される情報だけでなく、実際に見て、触れることを通して情報を得る機会も増やしていきたいと思っています」（向山先生）

小林先生は、地域内に咲くタンポポの種類の分布をテーマにフィールドワークを実践した。

「私は社会と科学とのつながりを生徒に知ってもらいたいと考えています。そうしたフィールドワークは物理の学習内容に直結していないことがありますが、生物や地学といった他の教科・科目に関する興味・関心につながる可能性があります。そのような機会も、教科・科目の学習意欲を高めるきっかけになると考えています」（小林先生）

生成AIの活用

生成AIを使う時の心得と
プロンプト集を作成・配布

探究学習では、生徒が自分で探究を

図2 生徒に配布した、生成AIを使う上での大切な心得とプロンプト集(抜粋)

生成AIを使う上での大切な心得～安全・効果的に活用するために～

- 1 情報の信憑性について：生成AIの情報を上手に使うために
 - ・生成AIの答えはうのみにしない。必ず裏づけを！
 - ・情報の出所を確認する習慣を。
 - ・最後は自分で考え、判断する。
- 2 プライバシーとセキュリティについて：自分と周りの人を守るために
 - ・個人情報・機密情報は入力しない。
 - ・不適切・有害な情報に注意。困ったらすぐ相談！
 - ・利用規約を守る。
- 3 著作権と倫理的な使い方について：責任あるクリエイターになるために
 - ・著作権を尊重し、無断利用しない。
 - ・悪用・乱用は厳禁。倫理的に利用する。
- 4 生成AIとの上手なつき合い方について：生成AIを「賢い相棒」にするために
 - ・質問は具体的に、明確に。
 - ・生成AIだけに頼らず、多角的に情報収集。
 - ・情報を批判的に吟味する。
 - ・生成AIは思考の補助。丸投げせず、主体的に学ぶ。

プロンプト集

[○○] や [△△] の部分を自分の言葉に置き換えて使おう！

STEP 1 探究テーマを見つけよう！

- ・私は将来、[○○ (興味のある分野や職業)] になりたい (興味がある)。それに関連する探究テーマのアイデアをいくつか、[高校生でも取り組みやすい、社会とのつながりがある、などの条件] という観点で提案して。

STEP 2 探究の視点を広げ、計画を立てよう！

- ・探究テーマは、「[○○ (決めたテーマ)]」。そのテーマをどんな視点 (切り口) から調べると深まるかな？ 重要な視点を3～5つ教えて。

STEP 3 もっと深く！ 探究を掘り下げよう！

- ・探究テーマ「[○○]」について、[△△ (今分かっていること)] まで調べた。ここからさらに探究を深めるために、どんな問いを立てるとよい？ もっと本質に迫るための問いを提案して。

STEP 4 探究の成果をレポートにまとめよう！

- ・探究テーマ「[○○]」のレポートを書く。読み手に分かりやすく伝わるレポートの構成 (章立て) を提案して。各章に何を書けばよいかも教えて。

STEP 5 探究の成果を発表しよう！

- ・探究テーマ「[○○]」について、[△分] で発表する。探究の面白さや重要性が伝わる発表の構成 (流れ) と、各パートの時間配分の目安を教えて。

心得、プロンプト集は、いずれも生徒に配布した資料を抜粋したもの。
※学校資料を基に編集部で作成。

深めるための補助ツールとして、生成AIの活用を始めた。生徒が安心して生成AIを使い始められるよう、「生成AIを使う上での大切な心得」と、探究学習の各プロセスにおいて生成AIにヒントを提案させるためのプロンプト集をそれぞれ作成し、生徒に配布した(図2)。

「生徒の興味・関心は多岐にわたるため、教師が専門的な助言をできない場合があります。そのような時に生成AIを活用すれば、取り組む課題に関

する情報や、自分が持てていなかった視点からの情報を得ることができます。そのように、生成AIは生徒が探究を自分で深める時にも役立っています」(向山先生)

とは言え、生成AIはあくまでも補助的に使うものであり、何らかの情報を得たとしても、最終的には自分で物事を判断する必要があることを強調して生徒に伝えている。

「生成AIを使えば必ず正解を出してくれるわけではありませんが、探究

学習を深めるためのヒントを得られる可能性があると、生徒に説明しています」(向山先生)

成果と展望

各教師の情報活用能力の育成方法を共有し、相乗効果を高める

探究学習を進めるに連れて、探究学習に取り組む意義や価値を実感し、各教科・科目の授業にも、より前向きに取り組みうとする生徒が増えてきた。

水守智士校長は次のように語る。

「自分が心から探究したいと思って設定した課題が各教科・科目の学習と結びついていることに、多くの生徒が気づいたのだと思います。教師は、探究学習を通して生徒が成長していく姿を見ているので、担当する教科・科目においても情報活用能力をどのように育成したらよいのかという意識を、より強く持つようになってきています」

今後の展望として、同校は探究学習と各教科・科目の学習のつながりを見える化する体制づくりを挙げる。

「教科・科目における情報活用能力の育成は、各教師に委ねている部分が大いなのですが、教師一人ひとりの工夫を大切にしながらも、学校全体として同じ方向に進むことが重要です。その実現のためには、まずは各教師の実践を見える化する取り組みを管理職が推進し、各教科・科目におけるどのような学びが情報活用能力の育成や探究学習につながるのか、教師も生徒も理解できるようにしたいと考えています。その取り組みを通して、一歩ずつでよいので、生徒も教師も着実に前進する学校をつくっていききたいと思っています」(水守校長)

多くの教科・科目が探究学習にかかわり、高度情報化社会に貢献する力を育む

兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校

兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校は、これからの教育課程のあり方について全校体制で議論するための分掌横断の会議体を立ち上げた。同会議体での議論の結果、データサイエンスを基盤とする探究学習を、文系教科・科目の担当教師もかわりながら高校1・2年次に実施することを決定。データを分析し、事実に基づいて解釈し、主張する力を育むことで、高度情報化社会に貢献できる人材の育成を目指している。

注目ポイント

- ✓ データを活用した探究学習に多くの教科・科目の教師がかかわり、高校1・2年次に指導
- ✓ 1年次は、数学科、情報科、国語科が軸となり、情報を活用する力の土台を育成
- ✓ データを活用した探究学習や研究授業に生徒も教師も没頭する特別な時間割を編成

「本校が育成を目指す『情報活用能力』データを分析する力を発揮して現代社会に貢献する」

兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校は、「やってみなはれ」をモットーとし、これまでも文系、理系を問わず探究学習に力を入れ、社会に貢献できる生徒を育成してきたと、中井啓之校長は語る。

「本校は、戦後の日本の復興を担う人材を育成するために創設されました。高度情報化社会の現代において活躍できる生徒を育てるためには、情報活用能力の育成が欠かせません。そもそも、社会の課題を把握して自分で問

いを立て、その解決に向けて模索する探究学習に、情報活用能力を発揮することなく取り組むことは不可能です」

同校は2024年度に、文部科学省の「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」と、兵庫県の「HYOGOグローバルリーダー育成プロジェクト」に採択された。前者において「情報Ⅱ」「理数探究実践」の実施を通じた理数系人材の育成を、後者において文理融合型や国際系などの理数教育以外の探究学習の充実を図ることを目指すこととした。

「2つの事業において、統計学や数学、計算機科学などの知識・技術を用いてデータを分析し、事実に基づいて

解釈し、主張する力を生徒に育成することを目標として掲げ、教育活動のさらなる充実と体系化に取り組んでいます」（中井校長）

学校全体の取り組み

学校全体の教育方針としてデータサイエンスに取り組む

同校は2つの事業に採択された24年度に、文理融合型探究人材の育成に資する具体的な教育活動を検討するために、教務部、探究科、情報科、グローバル探究部の責任者が参加する「新領域授業委員会」という分掌横断の会議体を立ち上げた。（P.19図1）。

当初、委員会には「データはすなわち数値だ」「データは処理するものだ」といった認識の教師もいた。そこで、「データ」は単なる数値ではなく、創り出すものであり、その題材には自然言語、音楽、文献等があること、データを創り出すところに各教科の知恵が必要であることを共通理解することから始まった。そして、客観的な事実（データ）に基づいて自分なりに解釈し、主張する力を生徒に身につけてほしいという考えから、「データサイエンス」を探究学習の基盤に据えることとした。その上で、データサイエンスの力

情報活用能力を学校全体でどう育成するか？

学校概要

設立 1950（昭和25）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約300人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、筑波大、千葉大、京都工芸繊維大、京都大、大阪大、奈良女子大、神戸大、大阪公立大などに107人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ1028人が合格。



香川 良
入試広報部
かがわ・りょう
同校に赴任して2年目。
数



増井 貴明
高校2学年担任
ますい・たかあき
同校に赴任して2年目。
数



林 宏樹
新領域授業委員会委員長
はやし・ひろき
同校に赴任して4年目。
数

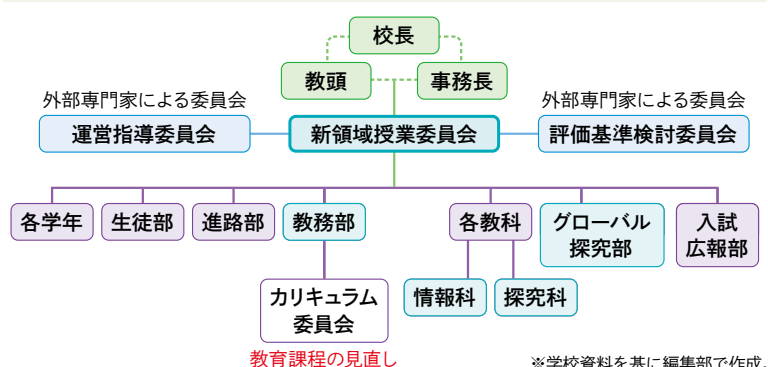


道北 秀寿
教頭
みちきた・よしひこ
同校に赴任して19年目。



中井 啓之
校長
なかい・ひろゆき
同校に赴任して38年目。

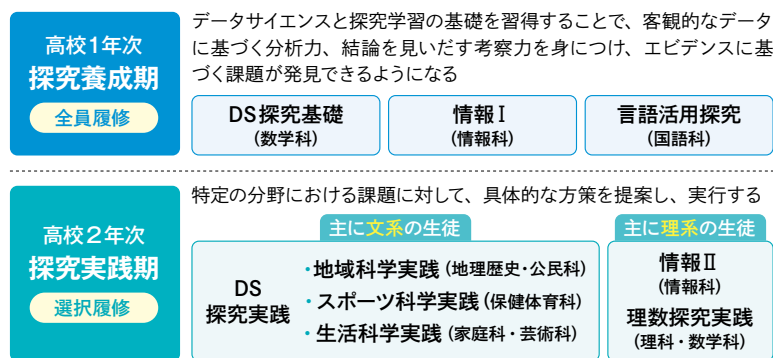
図1 同校内の組織における「新領域授業委員会」の位置づけ



を育む探究学習のあり方などについても議論。その結果を踏まえて同委員会が教育課程の原案を作成し、カリキュラム委員会で審議して教育課程を完成させた。

同委員会を校内の分掌を横断する位置づけとし、様々な分掌の責任者を参加させたのは、複数の分掌で順番に検討するような案件の意思決定が迅速に行われるようにするためであることも

図2 データサイエンスに基づく探究学習のカリキュラムイメージ



※学校資料を基に編集部で作成。

に、学校全体の教育方針として全教職員がデータサイエンスに取り組むよう、意識づけを図るためであると、道北秀寿教頭は説明する。

「データサイエンスは、理系教科・科目の担当教師やデジタル機器の取り扱いが得意な教師だけが指導すればよいものではありませんし、生徒全員が身につけるべき資質・能力だと考えています。本校ではすべての教科・科目

でデータサイエンスに取り組み、すべての生徒を対象とする仕組みづくりを目指しました」

25年度4月、高校1年次の学校設定科目として、数学科、情報科、国語科が連携して実施する「DS（データサイエンス）探究基礎」を新設した（図2）。新領域授業委員会委員長の林宏樹先生は、エビデンスを用いて探究学習に取り組む素地を高校1年次につくることを目指したと説明する。

「データの分析手法は数学科、表計算ソフトを使ったデータ処理の方法は情報科、そしてデータによって裏づけられた探究学習の成果のまとめ方については国語科で指導します。成果のまとめでは『キャリアナビ（*1）』を使い、事実や主張、考察を整理して文章を構成する力を養います」

林先生は、各教科・科目の担当教師と対話を重ね、データサイエンスという切り口でどのような教育活動を実践できるか、各教科・科目の指導内容を確認しながら一緒に考えたと言った。

「まずは担当者間で、『各教科の内容はデータサイエンスとは無縁ではない』という目線合わせを行いました。国語、地理歴史・公民、音楽、保健体育などにおいても、言語や映像など、様々な形でデータの収集と解釈が学習

*1 ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習に取り組むことができるデジタル教材。

図3 「統計的な問い」を立てる時の7つの観点

「統計的な問い」:

データを分析し、その結果を基に回答できるような問い

- 1 問いは、要約、比較、関係のいずれかであること
- 2 分析方法を説明できること
- 3 どんなデータを収集するのが明確であること
- 4 調べる集団と収集予定のデータに齟齬がないこと
- 5 回答が「はい/いいえ」にならないこと
- 6 データを収集する必要性があること
- 7 個々のケースに過度に注目しないこと

※学校資料を基に編集部で作成。

の過程で行われることを、対話を通して互いに認識するとともに、本校で育成を目指すデータサイエンスの力は、デジタル機器の使用や数字の処理に限定して求められるものではないことを共有しました。

高校2年次は、生徒は自分の興味・関心がある分野を選択して探究を深める(P.19図2)。具体的には、文系の生徒は「地域科学実践」「スポーツ科学実践」「生活科学実践」の3つの分野の中から1つを選び、その分野に関する課題を自分で設定し、探究学習に取り組む。理系の生徒は「情報Ⅱ」「理数探究実践」の2科目を履修する。以上のように、全生徒が2年間をかけた

様々な教科・科目を通して、データサイエンスを基盤とした探究学習に取り組めるようにした。

教科・科目の指導事例① 探究学習

数学科、情報科、国語科で探究学習の素地をつくる

「DS探究基礎」の授業は、1学期は2週間に1回程度の頻度で行われた。1学期に重視したのは、「統計的な問い」を立てられるようにすることだと、同授業を担当した数学科の増井貴明先生は説明する。

「『統計的な問い』とは何かを生徒に説明した上で(図3)、1学期後半には生徒が自分が興味を持った課題について、『統計的な問い』が立てられるようになることを目指しました」

ある日の授業ではまず、生徒は「統計データ分析コンペティション(※2)」で表彰された高校生の論文を読み、その中でどのような問いが立てられているか、その問いに対する答えとして、どのような統計データに基づいて、どのような可視化を行っているかを調べた。次に生徒は『統計的な問い』を立てることに取り組んだが、その際、増井先生が数学科担当ならではの視点で指摘したのが、「定義」の重要性だ。

「定義があいまいだと、データを正しく収集することができません。例えば、『若者に人気の曲とは何か』という問いを立てた生徒には、『若者』『人気』の定義を問いました。また、あるデータに対して『平均値』を用いて分析をしようとしている生徒に、『外れ値がある』と平均値は大きく動くけれど、分布の状況はしっかり確認した?』などと、データを活用する際に注意すべきことも併せて問いかけました」

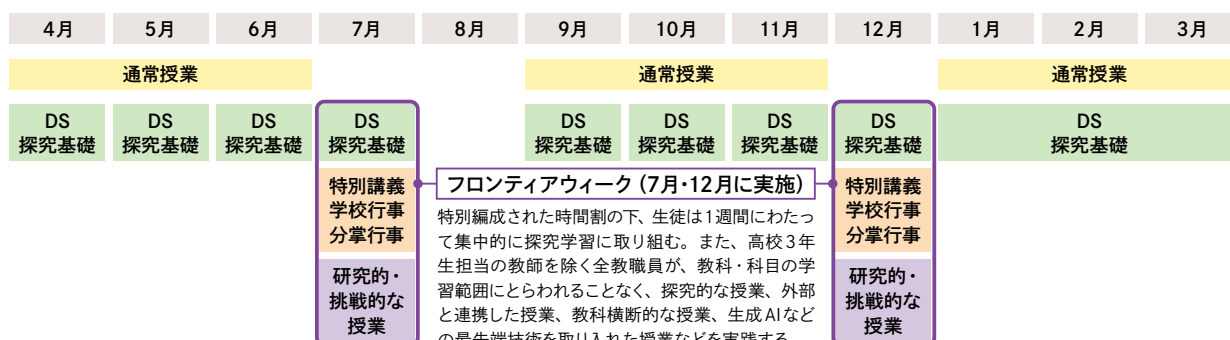
そのようなデータ活用の指導と並行して、表計算ソフトを用いる情報科の授業で、データの散らばりの判断を行う際に、四分位範囲と標準偏差では異なる結果になる場合があることを体験させたり、国語科が主体となる言語活用探究の授業で「スマートフォン」の学校への持ち込み「レジ袋の有料化」といった題材での小論文の作成に向けて、「キャリアナビ」の「構想メモ」の機能を使って文章の書き方などを指導したりした。

教科・科目の指導事例② 特別授業

多くの教科・科目で新しい授業に挑戦

7月と12月の定期考査後の1週間を使って設定しているのが、生徒が集中的に探究学習に取り組む特別な時間割

図4 データサイエンスに基づく年間指導計画とフロンティアウィークの概要



※学校資料を基に編集部で作成。

※2 高校生、大学生などを対象に、地域別の統計をまとめたSSDSE(教育用標準データセット)を用いた統計データ分析の論文を募集し、その分析力を活用した課題解決のアイデアを競うコンペティション。総務省、独立行政法人統計センターなどが共催する。

図5 フロンティアウィーク開講講座（2024年12月実施）

テーマ「AIと共生する『AIプログラム』」

- AI × 国語 「AIと考える俳句の助詞」
- AI × 公民 AIとの対話から学ぶ主権者教育 Let's think about politics
- AI × 数学 数学で勝負！ ～VS生成系AI～
- AI × 理科 ChatGPTを活用した論文執筆 ～ChatGPTを信用して大丈夫？～
- AI × 理科 生成AIと著作権
- AI × 英語 AIと学ぶ未来の英語学習 ～効果的な活用法とリスク対策～
- AI × 家庭科 AIとともに日本の食の未来について考える
- AI × 探究 学び（課題設定）を深めるAI活用
- AI × スポーツ AIによるバレーボール動作分析 スポーツ科学

※学校資料を基に編集部で作成。

「フロンティアウィーク」だ。同期間には、有識者による講演会や、教師のスキルアップを目的とした研究授業なども実施している（P.20図4）。

「フロンティアウィークは新領域授業委員会が企画し、高校3年生担当の教師を除く全教師が、企業や研究機関と連携した授業や教科横断的な授業、生成AIなどの最先端技術を取り入れた授業などを行います」（道北教頭）

ーを活用した授業を各教科・科目で実施した（図5）。例えば、地理歴史・公民科の教師は、生徒が新聞に掲載された各政党の公約を読んだ上で模擬投票する際に、生成AIにも同様に公約を読ませて投票先とその理由を答えさせた。さらに英語科の教師と連携して、生成AIに対するプロンプトを日本語で作成した場合と英語で作成した場合とで、出力される内容の正確性がどのように異なるかなどを検討した。どの教科・科目でも、生成AIの回答が必ずしも正しいとは限らないことを前提にして、生成AIを補助的に活用しつつ、自分で考えて判断することの大切さを生徒に気づかせようとした。

生成AIの活用

実践を通して生成AIの問題点に気づかせる

同校では、フロンティアウィークだけでなく、日々の授業においても生成AIを積極的に活用している。そのため、生成AIを使用する際のリスクを体験して学ぶ機会を設けている。

「24年度の高校1年次の探究学習では、学校の歴史などについて生成AIに質問し、その回答に、事実に基づかない情報やウソがどれだけ盛り込まれ

るかを検証しました。また、生徒が書いた探究学習の論文の改善の方向性を生成AIに提案させ、それを踏まえて論文を推敲する活動にも取り組みました」（増井先生）

情報モラル教育においても体験的な学びを重視している。例えば、25年度に中学生に対して行った授業では、実際にトラブルに発展したSNS上のやり取りについて、事実なのか、思い込みや偏見なのかを整理させ、トラブルの原因を考えさせた。その際、生徒間での協議だけでなく、生成AIに防止策や問題点を出力させることで、自分たちの考えの不足部分など、新たな視点を獲得の活動を行った。そうして「自分もトラブルの原因となるような言動をしていないか」と、当事者意識を持たせてから、有識者の講演を聞かせた。「情報1」においても今後、生成AIを活用して、情報をうのみにしない判断力が身につく授業を行う予定だ。

成果と展望

生徒の自己肯定感が高まる探究学習へと進化

多くの教師が自身の担当教科・科目でもデータを活用する授業を行えることに気づき、実践を重ねてきたことで、

生徒は教科・科目の授業においても定義を大切にして学習に取り組むようになったと、「DS探究基礎」を担当する数学科の香川良先生は語る。

「フラスメートと話し合う中でも、『言葉の定義があいまいだから、これからどういうデータを集めればよいかが明確ではない』などといった声が生徒から聞かれるようになりました」

今後は、データを活用することで社会に貢献できるという手応えを感じながら、生徒が自己肯定感を高めていくカリキュラムを設計したいと、道北教頭は考えている。

「高校2年次に『DS探究実践』に取り組み、そこで得られた成果を英語でまとめ、海外研修などの機会を使って同世代に向けて発信するといった経験は、生徒の自己肯定感を高めるはずだ。そのような探究学習では、英語科が大きな役割を担うことになりま。そのように、データサイエンスを基盤とする探究学習にすべての教科・科目を有機的につなげて、教育活動を充実させていきたいと考えています」

「生徒のやる気は学校の環境次第だ」と道北教頭は語る。データサイエンスを基盤とする探究学習を推進することで、同校はすべての生徒、そして教師のやる気を引き出すつもりとしている。

知識だけではトラブルは防げない。 情報モラル指導の核心は「自分事化」

静岡大学教育学部 学校教育講座 准教授 **塩田 真吾**

2024年に総務省が行った「我が国における青少年のインターネット利用に係る調査」では、中学1年生から高校3年生までの約46%が、インターネット利用において何らかのトラブルに遭遇したことがあると回答している。生徒が事件やトラブルから自分の身を守りながら、安全かつ適切に情報を活用できるようにするために、学校がすべきことは何か。情報モラルの指導について、静岡大学教育学部の塩田真吾准教授に聞いた。

「知っている」だけでは
トラブルは防げない

情報モラルは、著作権の侵害といったセキュリティ・権利に関するリスク、情報端末の長時間利用といった健康・管理に関するリスク、いじめや誹謗中傷といったコミュニケーション・発信に関するリスクの3分野に整理できます。そのうち、セキュリティ・権利に関するリスクは、どのようなことが法律に違反しているのかを生徒に教えることで、ある程度トラブルの発生を未然に防ぐことができます。しかし、健康・管理に関するリスクとコ

ミュニケーション・発信に関するリスクは、知識があってもトラブルに発展してしまつてことがあります。

学校で情報モラルに関する知識を教えられるにしてもトラブルを未然に防ぐことができないのは、生徒が教師の説明を自分事化して聞くことができていないからです。これまで学校で行われてきた情報モラルに関する指導は、トラブル事例を紹介し、「こういうトラブルに巻き込まれないよう、気をつけましょう」などと教えることが一般的でした。しかし、どんなに具体的な事例を紹介しても、多くの生徒は、「自分はそのようなトラブルは起こさない」など

しおた・しんご 早稲田大学大学院博士課程修了。千葉大学特任研究員、静岡大学教育学部助教、講師を経て、現職。静岡大学若手重点研究者（第4期・第5期）。専門は教育工学、授業デザイン。「社会とつながる学び」をテーマに、現代的・社会的課題（情報、キャリア、リスクなど）の授業デザインについて工学的に研究している。文部科学省「情報モラル教育推進事業」検討委員会副座長、同「学校DX戦略アドバイザー」などを務める。



と他人事として捉えてしまつたのです。その原因は「感覚のズレ」にあります。例えば、SNSであろうと、人の嫌がることを発信してはならないということは、どの生徒も分かっていると思います。しかし、多くの学校でSNS上のトラブルが起ります。そこには、人によって何を嫌だと感じるかが異なるという感覚のズレがあります。自分は嫌だとは感じないことを、人によっては嫌だと感じることもあり、一方で自分は嫌だと思うことも、人によっては特に気にしないことがあるという感覚のズレを確認することが、SNS上のトラブルを自分事として捉えるためには欠かせません（ワーク1）。

飲食店などでの迷惑行為を撮影した動画をSNSに投稿するトラブル事例を紹介すると、ほとんどの生徒は「自分はそんな愚かなことはしない」などと言つはらずです。しかし、「自分はそんな愚かなことはしない」と言えるのは、トラブルが発生する状況が想像できておらず、自分もトラブルを起こしてしまふ可能性があるということに考えが及んでいないからです。「仲間と盛り上がってしまったのかもしいない」「怖い先輩に強要されてしまったのかもしいない」などとトラブルの発生の背景を想像し、「状況次第では自分も迷惑

行爲をSNSに投稿してしまつかもしれない」と自分事化することで初めてリスクをコントロールすることができるようになります（P.24ワーク2）。

自分がトラブルを起こしてしまう経緯や場面を具体的に想像させる「場面強制想像法」を用いることで、不適切な情報の送受信・拡散やSNSを通じて闇バイトへの関与など、ほとんどの生徒が「そんな愚かなことはしない」と考えるトラブルについて、どのような状況だと自分も巻き込まれてしまう可能性があるかを想像してみることができそうです。さらに生徒だけでなく、教師も「自分が生徒の個人情報やSNSなどに公開してしまうとしたら、それはどんな時だろう」となどと、「自分は絶対にしない」と考えている事象でもそれが起きてしまう状況を想像してみることができるといいですね。

情報モラルの指導を通じて
リスク教育を推進する

情報モラルに関するトラブルの中で、どのようなものが自校において特に発生しやすいと考えられるのか、生徒の実態を基に教師が話し合うことも重要です。

生徒の生活・学習環境などによって、

① 下記の5つについて、あなたがSNSなどでクラスメートからされて「嫌だ」と感じる順に並べてみましょう。

	嫌だ					嫌ではない
あなた						

あなたが絶対に嫌なラインはどこかを考えて線を引こう

② なぜその順番にしたのか、近くの人と共有してみましょう。

③ たかしとはなこの間にどのようなトラブルが起きる可能性がありますか。

	嫌だ					嫌ではない
たかし	自分が一緒に写っている写真を公開される	すぐに返信が来ない	知らないところで自分の話題が出ている	話をしている時にケータイ・スマホを触っている		なかなか会話が終わらない
はなこ		話をしている時にケータイ・スマホを触っている	知らないところで自分の話題が出ている	すぐに返信が来ない	なかなか会話が終わらない	自分が一緒に写っている写真を公開される

たかしが絶対に嫌なライン

はなこが絶対に嫌なライン

どのようなことを「嫌だ」と感じるかは人によって異なることを、他者とともに具体的に確認していくワークです。そのような活動を経験することで、ようやく「自分の行為が誰かを嫌気持ちにさせるかもしれない」と、SNS上のトラブルを自分事として考えられるようになります。

発生しやすいトラブルは異なります。情報モラルに関するトラブルを一覧にして(図1)、自校において発生する可能性が高いトラブルはどれか、発生した時に生徒に深刻な影響を与えてしまうトラブルはどれかを、管理職や教科「情報」の担当教師、生徒指導担当の教師などが集まって話し合い、優先的に指導する内容を決めるとよいでしょう。そして、教師がその指導内容を一方的に教えるのではなく、探究学習やホームルーム活動などの時間を使って、生徒もともにリスクについて考えるのです。

私は、高校現場においては、健康管理に関するリスクへの対応が今後ますます重要になると考えています。その理由の1つが生成AIの普及です。家庭学習などでも生成AIを利用するようになることで、これまで以上に端末の長時間利用が進み、健康被害へとつながる危険性が高くなるからです。生成AIの普及を踏まえて、健康・管理という観点での指導が改めて求められると思います。

従来の情報モラルの指導は、高校であれば「総合的な探究の時間」や全校または学年集会などの場で行われることが多かったことと思います。情報モラル教育の専門家の講演などを実施し

ている学校も少なくないでしょう。今後はそうした指導に加えて、各教科の授業においても、ICTを活用する場面などで少しずつ情報モラルの指導を取り入れていくことが重要になります。情報の信頼性を確かめる方法、批判と非難の違い、著作権の大切さなどは、探究学習はもちろん、各教科の授業でも触れることは可能ではないでしょうか。ICTを使って情報を活用す

図1 情報モラルに関するトラブルの例

1 長時間利用

ゲームや動画、コミュニケーションにかかわる時間が多過ぎたり、「ながらスマホ」をしたりする。

2 高額課金

たくさんのお金を使って、ゲームのアイテムなどを購入してしまう。

3 不適切なサイトの閲覧

性的描写や暴力表現など、青少年にふさわしくないサイトを閲覧する。

4 出会い

SNS で知らない人から会うことを求められたり、自分の画像を送ることを求められたりする。

5 著作権の侵害

無許可の映像や音楽をアップロードしたり、違法と知りながら音楽や映像をダウンロードしたりする。

6 不適切な情報の発信

悪ふざけの写真やデマなどをSNSで発信する。

7 個人情報の投稿

SNS へのテキストや写真などの投稿から、個人を特定できる情報を流出させる。

8 悪口・いじり

グループトークでいじりや無視をしたり、短文の意味の取り違いによって誤解したりしてしまう。

※塩田准教授の提供資料を基に編集部で作成。

Q1 自分たちが飲食店で「ふざけて」しまうのはどんな時?

例えば、ファミリーレストランで、

大声で騒いでしまう

無料の物を大量に使っちゃう

ドリンクバーや食べ物で遊んじゃう

お店の物を不衛生に使っちゃう

店員さんにふざけて声をかけちゃう

のはどんな時?

いつ

- 1 部活動の帰り
- 2 試合の後
- 3 塾の帰り
- 4 学校の帰り
- 5 遊びの帰り
- 6 テストが終わった後
- 7 行事が終わった後
- 8 勉強している時
- 9 暇な時
- 10 話をしている時

なぜ

- 21 場を盛り上げようとして
- 22 面白いと思われたくて
- 23 笑ってほしくて
- 24 テンションが上がってしまって
- 25 罰ゲームで
- 26 ほかの人もふざけていて
- 27 好きな人が見ていて
- 28 友人が見ていて
- 29 動画に撮られていて
- 30 「いいね」が欲しくて
- 31 気分転換のために
- 32 励ましてあげようとして

誰が

- 11 友人
- 12 先輩・後輩
- 13 部活動の仲間
- 14 同級生
- 15 好きな人
- 16 お店の人
- 17 とても仲がよい人
- 18 怖い人
- 19 気になっている人
- 20 ノリのよい人

情報モラルを学ぶワーク2

迷惑行為とそのSNSでの公開はなぜ起きる?

Q2 飲食店で高校生のAくんが、右の画像をSNSに公開してしまった背景を想像してみましょう。

多くの人が「自分はしない」「自分は大丈夫」と考えているようなトラブルは、事例を紹介して「気をつけましょう」と言っても、有効な防止にはなりません。トラブルに巻き込まれてしまう状況を具体的に想像させることが大切です。



※塩田准教授の提供資料を基に編集部で作成。



本特集を 振り返って

3つのステップで、情報活用能力 を学校全体で育成する

VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇

本特集を振り返ると、冒頭の問い「情報活用能力を学校全体でどう育成するか？」の答えとして、次のステップが見えてきます。

1. 「情報活用能力」の定義について共通認識を図る 単に「情報技術を操作できる力などのイメージが持たれやすい「情報活用能力」には、「情報技術を活用した情報の収集、整理・比較、発信・伝達」であり、「情報技術」にかかわる資質・能力に焦点化する方向で中央教育審議会の議論は進んでいます。以上の点を校内で共通認識を図ることが第一歩です。

る場面において、情報モラルの大切さを伝えたり、生徒に考えさせたりする工夫を、短時間でもよいので教科を問わずに行っていくことが求められると私は考えます。

情報モラルの指導は、リスクをゼロにするための指導ではありません。トラブルが起きてしまふリスクは誰もが持っているということを前提にして、トラブルの発生の可能性を少なくする方法を理解させる指導です。リスクをコントロールしながら上手に生きていくという意味では、情報モラルの指導は「リスク教育」の一領域と考えるこ

とができます。例えば、場面強制想像法を用いて、迷惑行為をSNSで公開してしまふという状況を考える際に、生徒は同じ枠組みを使って薬物乱用やいじめなど、教師は飲酒運転などが起きる状況を考えることもできます。

教科の枠を超えて展開される情報モラルの指導を通じて生徒が得た気づきや身につけた力は、防災・交通・生活安全教育へと広く転用・発展できるといふことを、特に管理職の先生方には理解していただきたいと思います。

情報モラル・リテラシーの強化と向上のための 「GIGAワークブック」

「GIGAワークブック」は、児童・生徒の情報モラル・リテラシーの強化と向上を目的に、LINEみらい財団と塩田真吾准教授が共同で開発した教材で、無料で提供されている。児童・生徒に身につけてほしい内容に沿って、適切なコンテンツを簡単に検索することができることも、情報モラルの指導を取り入れたい教科や活用場面・スキル、トラブル事例からもコンテンツを絞り込むことが可能であり、指導に必要な時間の目安も掲載されている。

■コンテンツ例

「闇バイト」に気をつけるために

- ・トラブル 知らない人との出会い、プライバシーの侵害 など
- ・指導場面 SHRなど



教材のダウンロード、
問い合わせ先

GIGAワークブック2025活用サイト
<https://giga-work.jp/>

2. 指導の分担を図る 次に、誰がどのような指導を担うのかを検討します。分担の枠は、P.7図1の通り、情報技術の「活用」は各教科・科目の授業で、情報技術の「適切な取り扱い」や「特性の理解」は主に情報科で指導します。それらの指導を通じて学んだ知識・技能を「総合的な探究の時間」等で生徒に発揮させるといったイメージです。

3. 各教科・科目での情報活用場面を見る化し、指導の意識化を図る 情報活用能力の側面のうち「情報の収集、整理・比較、発信・伝達」は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業で行われる活動であり、既に多くの先生方がそつした授業を実践しているという意味で、情報活用能力の育成は新たに求められることではないかもしれません。求められるのは自身の授業における情報活用場面を自覚し、言語化することであり、それを教師間で共有し、情報活用場面を意識した授業を設計するようになる。学校全体での情報活用能力の育成が実現されるのではないのでしょうか。

「情報活用能力」は、前号の特集で取り上げた「中核的な概念」と同様、教えられるだけでは身につくという点も、有識者の話や3校の事例に共通していました。そつした点も踏まえながら、学校全体での育成を図っていただけたらと思います。

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

英語

「単元を貫く問い」を核とした
アウトプット活動と自己調整学習で、
主体的な学びの実現を目指す

福岡県立筑紫丘高校

徳永拓也 とくなが・たくや

同校に赴任して6年目。キャリア教育課課長。
英語科。



学校概要

◎設立 1927(昭和2)年 ◎形態 全日制/普通科、理
数科/共学 ◎生徒数 1学年約440人

◎2024年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、
東京科学大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、
神戸大、広島大、九州大などに232人が合格。私立大は、
慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大
などに延べ570人が合格。

私が
目指している
授業

昨年度の卒業生を担当した3年間は、生徒に学習時間を有効活用させ、自律的な学びを支援することに重点を置いてきました。2年次、3年次には小テストや課題を大幅に減らし、取り組むべき学習を生徒が自分で考え、選択できるよう、多様な内容・レベルの教材を用意しました。生徒は主体的に学習に取り組み、2025年度大学入学共通テストでは、「英語」のリーディングとリスニングの平均点がともに80点を超えました。25年度の1年次は、これまで通り大学入試での得点力の向上を目指しつつ、英語活用力を高めるアウトプット活動、中でもスピーキングを一層重視して授業を展開しています。

授業レポート

本時の概要

【対象】1年生 【教科・科目】外国語・英語コミュニケーションⅠ
 【単元】Chapter 7 Human Habitation on Mars
 【単元目標】宇宙開発の意義について考え、その是非を表現できる。
 【授業時数】全5時間のうちの3時間目
 【本時の目標】火星に住むことの可否について書かれた文章を読み、その内容をまとめたり、自分の意見を述べたりすることができる。



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介！



1 単語テストとディスカッション ⌚ 10 分間



授業の冒頭は、5分間の単語テストの後、5分間のトリオディスカッション（*）に取り組んだ。単元を貫く問い「国は地球上の喫緊の課題（貧困、気候変動など）よりも宇宙開発を優先すべきか？」について、生徒は賛成・反対の立場から相互に質問を投げかけ、多角的に思考を深めていった。

2 教科書の重要事項の理解 ⌚ 20 分間

本時のキー課題



説明の時間を効率化するためにプロジェクターを2台使用。1台には教科書に掲載されている重要単語・表現を、もう1台には徳永先生の解説を表示した。説明の合間に生徒は解説された英語表現を使うペア活動に何度も取り組んだ。その後、事前課題のプリントの問題の答え合わせもペアで行った。

3 セルフスタディータイム ⌚ 10 分間

本時のキー課題



授業の後半は、生徒が自分に必要だと判断した学習に取り組む10分間の自己調整学習「セルフスタディータイム」を実施。リスニング、シャドーイング、単語テストの見直し、あるいは単元を貫く問いに関する追加の情報収集など、多様な活動が見られた。

4 サマリー&オピニオン ⌚ 10 分間



ペアになり、本時の内容について1人の生徒が要約を、もう1人の生徒が自分の考えを、それぞれ相手に説明した。その後、ワークシートに自分が話した内容と授業の振り返りを記入し、提出して授業は終了した。

* 上山晋平先生（福山市立福山中・高等学校）が考案した、基本は3人1組で3分間行う英語のディスカッション活動。

発問・課題設定の観点

英語の力と、

自分で学びを選択する力の両方を育みたい



生徒は本単元を通して、「国は地球上の喫緊の課題（貧困、気候変動など）よりも宇宙開発を優先すべきか？」という根源的な問いと向き合います。その過程の本時は、「火星に住むことは実現可能なのか」について、生徒は議論しました。そのように、すべての単元で、その単元を貫く問いを1つ設定し、各授業では、その問いについて多角的に考えられるよう、様々な視点でディスカッションを行うとともに、文法や表現の知識を身につけていきます。

トリオディスカッション、ペアワーク、サマリー&オピニオンと、様々なアウトプット活動を行います。が、どれも「単元を貫く問い」に関連させています。そして、10分間の自己調整学習においても、問いに対する現時点の自身の理解度と課題に応じて、取り組むべき最適な学習内容が何かを生徒は考え、選択し、そ

れに取り組みます。自分の課題と自分に必要な学びを考え、選択・実行できる力を生徒に育むことは、英語の力を育成することと並んで、授業全体を通じて大きな目標です。

自分に必要な学びを考え、選択できる力を身につけてほしいという私の思いは、特に年度当初、自分自身の高校生時代の経験や後悔も交えながら、繰り返し生徒に伝えました。課題や予習、小テストなどを大幅に減らしても生徒の学習時間は減らず、模擬試験などの成績も下がらなかったのは、生徒が主体的に学習に取り組んだ結果だと思っています。

25年度は、スピーキング力を丁寧に見取るために、「英語コミュニケーション1（3単位）」のうち1時間をA・L・Tとのチーム・ティーチングにし、私は補佐的な立場で授業にかかわっています。発表やペア・グループでのやり取りにおける生徒の様子・姿勢を観察し、前向きに取り組んでいた場合は加点方式で「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映しています。今後もA・L・Tの力を借りながら、英語で話そうとする生徒の頑張りや流ちょうさなどの成長を丁寧に見取っていきたいと考えています。



毎回の授業で、学習内容の要約、自分の意見、授業の振り返りを書く。1コマの学習活動のすべてがこの時間につながっていく。

学習評価の工夫

授業に対する

生徒の思いに耳を傾け、

授業を改善していく



25年度は、スピーキング力を丁寧に見取るために、「英語コミュニケーション1（3単位）」のうち1時間をA・L・Tとのチーム・ティーチングにし、私は補佐的な立場で授業にかかわっています。発表やペア・グループでのやり取りにおける生徒の様子・姿勢を観察し、前向きに取り組んでいた場合は加点方式で「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映しています。今後もA・L・Tの力を借りながら、英語で話そうとする生徒の頑張りや流ちょうさなどの成長を丁寧に見取っていきたいと考えています。

授業改善の材料となるのが、授業後と定期考査後などの節目に実施する授業アンケートです（図）。アウトプット活動に対して前向きに参加できているかどうかはもちろん、2台のプロジェクターを使った私の説明が、難関大学志望者が多い本校の

生徒のニーズに合っているかどうかを確認しています。「教科書で出てきた慣用表現を使って英文を作る時間を設けてほしい」など、生徒はいろいろな要望を出してくれるため、授業改善のヒントになっています。

24年度の3年生が卒業する際に行ったアンケートでは、「課題や小テストが少なくても学力が伸びた」と答えた生徒が多く、授業満足度も100点満点で平均97点だったことが、今の自分の指導の自信になっています。

図 生徒の声を踏まえた授業改善の例

生徒の声	授業改善
「同義語・対義語をもっと紹介してほしい」	左側のスクリーンで関連語を繰り返し提示するようにした
「話す活動（音読の時間）を増やしてほしい」「英語コミュニケーションなのに会話の時間が少ない」	表現活動の時間を増やした
「終盤に詰め込みがちなので改善してほしい」「早口で聞き取りづらい時がある」	説明は前半に多めに配置するなど、話す速度や構成を意識して調整した

このほか、「黒板の特定の色が見づらい」「スクリーンの文字サイズが小さい」といった教師が気づきにくい指摘についても、徳永先生は生徒のニーズに合わせて授業を改善した。
※学校資料を基に編集部で作成。



3年間を見通した指導計画で主体的な学びを実現

「日々の学習のやらされ感をできる限り払拭し、生徒を主体的な学習者へと育てていくことが不可欠だ」。教師としてのキャリアを重ねる中でそんな思いが強くなっていた私は、23年度から参加している「若手教師・教育創造MTG*」の中で、自己調整学習に取り組む全国の先生方の実践に出会いました。果敢に授業改善に取り組む仲間から刺激を受けたこともあって、私自身、24年度から授業の一部で生徒が、自分に取り組む学習を自分で選択する時間を設けています。

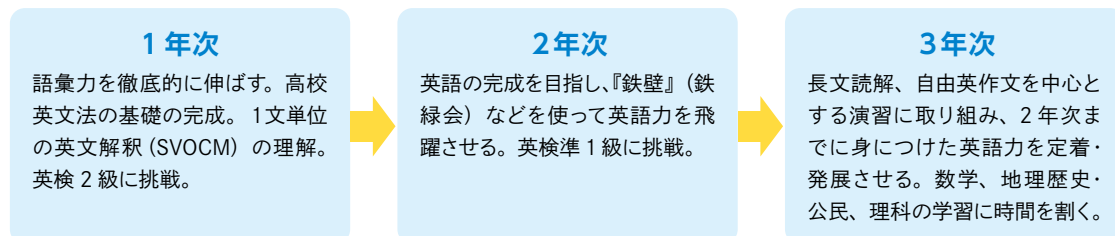
やらされ感のある学習から脱却するために必要なのは、生徒の「納得」と「選択」です。自分が学習すべきことを自分で考えることが、これからの社会を生きる上で重要だと生徒が納得し、自分に合った学習を自分で選択することを私たち教師が認め、支援することが大切です。また、生徒自身が3年間の英語学習を見通すことも不可欠です。どの時期に何をするのか、どんな状態を目指すのかというロードマップを生徒が意識して行動することが、毎時間の自己調整学習の充実を始めとする主体的な学びの実現には欠かせません。

私は生徒に「2年生で英語の完成を目指そう」といつも話しています。英語は上の学年に進級することを

待たずに早期に習得できる教科であり、3年次に英語以外の教科に時間をかけることができれば、難関大学の合格の可能性が高まると生徒に伝えていきます。また、「英語を完成させたら、3年次に全力で運動会のリーダーを務め、高校生活を満喫しよう」などと、高校生活の充実につながる声かけもしています。そして、各学年で何ができるようになることを目指すのか、そのために何を行うべきかを話しています。

1年次は、語彙、文法、リスニング、英文解釈など、基礎的なインプットを重視しなければなりません。同時に、学習の進め方や習慣といった「学び方」そのものを指導することも求められます。その中にある私も、アウトプット活動の時間を充実させたいと考え、その手段として、短時間で継続的に実施しやすい「トリオディスカッション」や「サマリー＆オピニオン」を導入しました。そのような授業中の活動の意味も、ロードマップを踏まえて生徒に丁寧に説明することで、生徒の学びが主体的になっていきます。生徒には私の意図が概ね伝わっているようで、「授業を通して英語の力がついている実感がある」「意味のある学習ができています」などと話してくれています。

■徳永先生の3年間の英語指導のロードマップのイメージ



成果と展望

インプット量を確保しつつ、アウトプット活動をさらに充実させたい



過去3年間は、模擬試験や大学入学共通テストの結果などに重きを置いて指導を行ってきました。今年度からはそれに加えて、日々の授業にスピーキング活動や自己調整学習を積極的に取り入れています。ペアやグループでのディスカッション、サマリー＆オピニオンなど、発話の機会を授業に多く取り入れています。授業アンケートの結果を見ると、生徒たちの反応は非常に良好です。発信するために知識を整理し、他者との対話を通じて新たな表現に触れる中で、アウトプットの過程でインプットも同時に深化・拡充できるといふ手応えを生徒が感じ取っているからだと思います。

課題や小テストを減らしても、アウトプット活動を充実させても、前向きに学習に取り組む生徒は、大学入試でも成果を収めるはずだと信じています。

* 全国から集った若手教師が自身の教育活動について報告したり、様々な教育課題について語り合ったりしているオンライン・コミュニティ。同コミュニティの取り組みの詳細は、本誌 2025 年 4 月号 P.18 ~ 21 で紹介。

読者から反響があった
授業実践の今を追う

数学

生徒に学び方を選択させ、
学力多層化への対応と、
主体性の育成に取り組む



岩手県立一関第一高校・附属中学校

長岡拓郎 ながおか・たくろう

同校に赴任して2年目。2学年担任。数学科。



学校概要

- ◎設立 1898 (明治 31) 年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 (全日制) 1 学年約 200 人
- ◎2024 年度卒業生進路実績 (全日制) 国公立大は、北海道大、岩手大、東北大、秋田大、山形大、東京科学大、東京大、大阪大などに 105 人が合格。私立大は、岩手医科大、東北学院大、慶應義塾大、早稲田大などに延べ 250 人が合格。

2018 年 10 月号に登場



2018 年 10 月号に掲載した長岡先生の記事は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next-benesse.jp/view_section/bknhs/article05418/ または下記の 2 次元コードからアクセスしてください。



私の授業、
こう
変わりました

私はこれまで、協働的な学びを中心とした授業を行ってきました。主体的に活動できる生徒の力を生かして教室全体の学びを活性化しようと、例えば問題演習には、生徒同士で話し合いながら取り組みませ、問題が解けた生徒がまだ解けていない生徒に教える形態にしました。しかし本校は、難関国公立大学を志望する生徒から中学校の学習内容が十分に定着していない生徒まで、学力の幅がかなり広いので、協働的な学びの実現に難しさを感じました。そこで今年 5 月から、自由進度学習を導入しています。具体的には、「基礎」「標準」「応用」のカテゴリーの中から、生徒が自分に合うものを選び、同じカテゴリーを選んだ生徒同士で学びを進める形態です。1 人 1 台端末や生成 AI の活用など、生徒が各自で学びを進めやすい環境が整ってきたことを生かし、それぞれの生徒に合った学びを実現するとともに、協働的な学びを組み合わせ、主体的に学習に取り組む態度の育成を目指しています。

授業レポート

本時の概要

【対象】2年生 【教科・科目】数学・数学Ⅱ
【単元】微分と積分 【テーマ】微分のグラフ
【単元目標】微分の考え方が分かるようになる。
【授業時数】全6時間のうちの4時間目
【本時の目標】接線の傾きはどういう働きをするのかを説明することができる。



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/>または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介！



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



1 本時の目標を説明

🕒 5分間

長岡先生は、前時までに学習した微分係数と導関数、接線の方程式のポイントを解説。「今日は、接線の傾きがどういふ働きをするのかを意識して問題に取り組もう」と、本時の目標を説明した。「それを習得すれば、『数学Ⅲ』の難しい関数も、その意味を理解できるようになる」と、接線の傾きの重要性を強調した。



本時のキー課題

2 各自で問題に取り組む

🕒 35分間

「基礎、標準、応用のどのカテゴリーで学ぶか、自分で決めて学び始めよう」と長岡先生が言うと、生徒は席を移動。基礎を選んだ生徒は黒板の前の席に座り、長岡先生の解説を聞きながら「関数の値の増加・減少」の問題に取り組んだ。標準を選んだ生徒は教室の後方、応用を選んだ生徒は別教室に移動し、個人やペア、グループで同様の問題に取り組んだ。

改善点

3つのカテゴリーを示し、生徒が学び方を選べるようにしました。生徒が自分のペースで学べるとともに、自分で学び方を選択したのであれば、より主体的に課題に取り組めるのではないかと考えました。

継続している点

どのカテゴリーでも協働的な学びが活発になるよう、「分からないことが出てきたら周りに聞こう」「疑問は近くの生徒と話し合おう」などと、繰り返し声をかけています。



本時のキー課題

また、応用を選んだ生徒は問題を解き終えると、教科書の2次元コードからインターネット上の解答のページにアクセスして答え合わせをし、次の問題に進んだ。長岡先生は度々質問などをしながら、生徒の学習状況を確認した。

改善点

大学入試の過去問題などの発展的な問題を掲載したプリントを事前に配布し、応用を選んだ生徒は自分でどんどん先に進めるようにしています。



3 まとめ

🕒 5分間

授業時間が残り5分になったところで、長岡先生は「まとめに入ろう。接線の傾きの働きについてグループでまとめて、代表者がそれを私に言いに来て」と声をかけた。生徒は自席に戻り、席が近い生徒4~5人(カテゴリーは混在)で話し合った。代表の生徒が来ると、長岡先生は接線の理解度確かめるため、「接線の傾きがプラスということは？」と尋ねた。「元の関数が増加」と多くの生徒が答えたが、答えが不十分だった場合は、先生は「何が？」「主語がないよね」「グループで再度話し合って」などとフィードバックし、確かな理解がうかがえるまとめを生徒が言えるまで、やり取りを繰り返した。

発問・課題設定の観点

生徒が学びを

見通せるよう、学習目標や

課題は最初に提示



生徒の学力の多層化が進む状況下でも生徒それぞれが学力を伸ばせる授業の実現を目指し、教科内で検討した結果、昨年度の1年次の数学は、標準・応用のいずれかを生徒が選ぶコース制にしました。生徒からは、「自分の学力に合った授業を受けられる」と好評でしたが、2年次はクラス編成上、コース制を採れませんでした。そこでコース制に似た形を単一のクラス内で実現できないかと考え、自由進度学習を導入しました。私が以前から実践してきた、生徒同士で話し合いながら問題演習に取り組む形を発展させて、生徒が次の3つのカテゴリーから自分に合うものを選び、各カテゴリー内で協働的に学ぶという形にしました。

◎**基礎** 教師の解説を聞きながら問題に取り組む。学び合いも行う。

◎**標準** 他の生徒と学び合いながら自分で問題に取り組む。

図 微分と積分のプリント冊子の内容・学習目標 (抜粋)

	内容	学習目標
Vol. 1	<ul style="list-style-type: none"> 平均変化率、極限值、微分係数 微分係数の図形的意味 導関数の計算 曲線上の点における接線の方程式 曲線上にない点から引いた接線の方程式 	<ul style="list-style-type: none"> 微分係数を定義・公式から求めることができる 微分することができる 接線の方程式を求めることができる
Vol. 2	<ul style="list-style-type: none"> 関数の値の増加・減少 関数の極大・極小 関数の最大・最小 方程式の実数解の個数 不等式の証明 	<ul style="list-style-type: none"> 増減表を用いてグラフを書くことができる 増減表・グラフを利用して、最大値・最小値を求めることができる 3次方程式の実数解の個数を求めることができる

微分と積分の分野ではプリント冊子は全部で6冊ある。※学校資料を基に編集部で作成。

◎**応用** 数学の力がある程度あることを前提に、自分で問題に取り組む、応用問題にもチャレンジする。

授業は最初に学習目標(本時は「接線の傾きはどのような働きをするのかを説明することができる」)を共有した上で、基礎は黒板の前、標準は教室の後方、応用は別教室に移動してプリント冊子に取り組めます。

冊子は、教科書の節ごとに教科書の例題や演習問題をまとめて掲載

し、解答欄やメモ欄を加えた10ページ程度の分量です(図)。同じ2年次担当の教師が作成し、学年共通で使用しています。1ページ目に該当の節の学習目標と、課題として出す問題集の範囲・提出口を示すことで、生徒が学びを見通し、主体的に計画を立てて取り組めるようにしています。

授業中、私は基礎の生徒を指導しつつ、合間に標準や応用の生徒を見に行き、学習の進捗を確認したり、生徒からの質問に答えたりします。

生徒は1年次から協働的な学びを経験しているため、標準や応用の生徒は自分たちで話し合いながら学びを進めることができます。

学習評価の工夫

単元テストで

生徒のつまずきや理解度を把握して授業改善



取り組み終えたプリント冊子は提出させて、「知識・技能」「思考・判断・表現」の評価材料にしています。教科書の2次元コードで解答を確認で

きる問題は生徒が答え合わせをし、解答のない問題は私が採点することで生徒の理解度を確認しています。また、1ページ目に掲載しているカレンダーに生徒が記録する自己管理の状況を、「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料にしています(コラム参照)。

単元の中盤には単元テストを実施し、定期考査はその単元テスト後の授業内容を出題範囲としています。単元テストを実施して1回のテストの出題範囲を狭めることにより、生徒は自分のつまずきに早く気づいて学習改善が図られやすくなり、教師は授業改善が進みます。ただ、単元テストにおいて学年全体でできなかった問題については、復習を促すため、生徒に事前に告知した上で定期考査で再度出題しています。

さらに、問題集の基礎・応用・発展の中から指定された数の問題に取り組む、それらの解答を書いたノートを提出させ、取り組み状況を3観点それぞれの評価材料としています。例えば、より難しい問題に挑戦した場合は「主体的に学習に取り組む態度」の評価において加点します。



生徒が学びを自己管理するための工夫

自由進度学習の導入にあたり、本校の附属中学校で自由進度学習を実践している数学科の教師の授業を見学しました。その教師は、単元の最初に当該単元の課題をすべて生徒に渡し、生徒が自分で単元末までの学習計画を立てて取り組む形にし、毎授業の最後には、本時に取り組んだ内容と振り返りを書く時間を設けていました。授業中、中学生が私語もせず、自分で学びを進めている様子を見て、生徒が自分で学習の進捗を管理できるようにすることは重要だと感じました。

私はその点を踏まえて、附属中学校も含む全校で導入したOPPシート（*）をアレンジしたシートと、プリント冊子のカレンダーを併用することにしました（下図）。具体的には、単元の最初に、その単元を学ぶ意義と学習目標を考えてOPPシートに書き込み、単

元の途中では、プリント冊子の1ページ目のカレンダーに、その授業で自分が学習した内容を記入します。そして単元の最後には、再びその単元を学ぶ意義を考え、自分が何を身につけたのかを振り返るという使い方です。その中で生徒は、自分の学びの目標や見通しを持つとともに、随時振り返りをしながら学びを進められるのではないかと考えました。

現在はOPPシートとプリント冊子のカレンダーを活用して、学びを自己管理できるようにしていますが、2枚のシートの要素を整理して1枚にすれば、生徒はより学び全体を見通して自己管理がしやすくなるはずです。そうなれば、一層主体的に学ぶことが期待できます。生徒の記入の状況などを踏まえて、よりよいシートの形を模索していきたいと考えています。

■ 数学のOPPシートと、プリント冊子の1ページ（抜粋）

OPPシート 高一高等学校 (中)

数学OPPシート 組 番 氏名

微分・積分を学ぶ意義とは何か？

その理由は？

授業を通して身に付けたい力は何か？

左は単元の最初の授業で、
右は単元末に記入

そのためにどのように学びに取り組むか？

プリント冊子の1ページ目

数学Ⅱ 第5章 微分と積分 Vol.Ⅱ for普通科							
	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
	6月30日	7月1日	7月2日	7月3日	7月4日	7月5日	7月6日
テスト・行事		7月連研K					
内容		7月7日	7月8日	7月9日			
テスト・行事		三者面談					
内容		7月14日	7月15日	7月16日			
内容		7月21日	7月22日	7月23日			
テスト・行事	祭日			特別授業			

「OPPシート」と「プリント冊子」の1ページ目のカレンダーを組み合わせ、生徒が学びの見通しを持ち、自己管理できるようにしている。

「テスト・行事」に、単元テストの日程や自分の予定を記入

「内容」に、その日に取り組んだ問題の番号などを記録

※学校資料を抜粋して掲載。

今後の課題は、生徒が自分で学ぶことを大切にしつつ、その学びが学力の向上につながっているのか、標準や応用を選んだ生徒も適切に見取り、学びを支援していくことです。学力の多層化にいかに対応していくのか、これからも試行錯誤を続けていきます。

今年7月、生徒にアンケートを取ったところ、現在の形態の授業を「大いによい」「よい」と答えた生徒は8割に上り、「自分のペースで学べる」「周りと相談しやすい」といった声が多く上がりました。私の解説を中心に授業を進める基礎を選んだ生徒は、私の話を集中して聞き、意欲的に問題に取り組んでいました。単元末までにカテゴリーを変えた生徒が数人いたことから、生徒は自分の理解度に応じて学び方を選ぶことができていると感じています。

成果と展望

8割の生徒が自分で学び方を選ぶ授業を「よい」と評価

* One Page Portfolio の略。学習目標や学習履歴、振り返りなどの記入欄を1枚にまとめたもの。

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

探究学習の
目標を明確化し、
高校生活と接続

日常生活のあらゆる場面で
自ら考え、行動すること求めて、
探究学習の充実を図る
兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校

生徒の 転換点

- 入学直後から対話や計画、振り返りの経験を積む
- 1年次2学期以降は、高校生活の様々な場面で生徒に自律を促す

探究学習の素地づくりとして フラットな対話を経験させる

兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校ではこれまで、「総合的な探究の時間」はクラス担任の裁量で実施されてきた。2024年度に普通科アドバンスコース1年生のクラス担任を務めた間柴史先生は、学校として体系立てた探究学習を確立することを念頭に、自身のクラスでの実践を開始した。まず間柴先生が行ったのは、探究学習の意義を生徒に伝えることだった。

「教師から指示されないと行動できない生徒にはなつてほしくない。学習はもちろん身の回りのことも含め、日常生活のすべてにおいて自分で考えて行動できるようになることが、探究

学習に取り組む目的だと話しました」

探究学習の素地づくりとして1学期に重視したのがグループ対話だった。生徒間の人間関係がまだできていない入学直後から様々な機会を使って、他者と対話する経験を積ませた。

「入学直後で互いのことをまだ知らないからこそ、遠慮や気負いのないフラットな対話ができると考え、英単語の暗記法といった学習方法なども、グループ対話を通して共有させました。自分たちの力で『答え』にたどり着く経験をさせたかったのです」（間柴先生）

さらに間柴先生は、生徒に家庭学習の計画とその振り返りに頻繁に取り組ませ、よりよい家庭学習のあり方についても話し合わせてた。

2学期以降は、自分たちで考え、行動するこ

学校概要

設立 1936（昭和11）年
形態 全日制／普通科・国際文化科／共学
生徒数 1学年約260人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、兵庫県立大に1人が合格。私立大は、早稲田大、京都外国語大、京都産業大、同志社女子大、同志社大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、関西外国語大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大、神戸学院大などに延べ153人が合格。短大・専門学校進学40人。就職6人。



教諭
嶋田利希 しまだ・らいき
同校に赴任して2年目。生徒会担当。国語科。



総務部主任
吉本英寛 よしもと・ひでちか
同校に赴任して10年目。数学科。



教頭補佐
間柴 史 ましば・つかさ
同校に赴任して2年目。普通科アドバンスコース主任。国語科。

生徒に対する教師の働きかけ

目標

自分たちで考え、
行動する力を身につける

1 年次 1 学期

- 学校生活の様々な場面でグループ対話に取り組み、他者との対話を通して新たな価値を創造することができることを体感する
- 計画の立案や取り組みの振り返りを頻繁に行い、主体的に物事を進める方法を学ぶ

変化

1 年次 2 学期以降

- 探究学習では、「他者のために」という課題の設定の方針を指示し、具体的な活動は生徒に委ねる
- HRの進行や小テストの計画など、教師が行ってきた活動の一部を生徒に任せる

指導の変化に対する 生徒の声 現2年生・金子千寿さん

1年生の2学期に、先生が突然、終礼や講習などについて「今後どうするかは君たちで決めなさい」と言いました。それらがなくなると困ることになると思い、友人と一緒に先生に相談しに行き、終礼は私たち生徒が行い、講習の時間割も生徒が考え、先生に提案しました。探究学習も、生徒だけで考えて進めました。最初は「人口減少」「戦争」などの大きいテーマを課題に設定していましたが、グループで話し合う中で、高校生が困っていることを課題に設定しようということになり、最終的には「紙の教科書は重くて持ち運びにくいのに、なぜデジタル教科書は普及しないのか」という課題を設定しました。

※学校資料を基に編集部で作成。

とを生徒に強く求めた。終礼の進行、学習計画表の作成、放課後に行う外部検定試験対策講座など、教師が行ってきた活動の一部について、間柴先生は「君たちが必要だと言わない限り私はやらないし、必要だと思ふのなら、君たち自身でやってもらっていいよ」と伝えた。生徒たちは戸惑いながらも、自分たちで終礼を行い、講習の時間割を作成し、教師に提案した。

探究学習を通して、自分たちで 考え、行動する力を獲得

探究学習では、「他者のために」という課題の設定の方針と、12月末に成果発表をすることだけを伝え、課題の設定から仮説の検証の方法まで、すべてを生徒に考えさせた。

「生徒は1学期に行った家庭学習の計画とその振り返りの経験を基に、12月末までの探究学習の計画を自分たちで考えました。また、環境問題や国際紛争といった大きな課題を設定していたグループは、グループ対話を通して身近な課題に設定し直していました」（間柴先生）

とは言え、課題が決まらないグループ、情報収集が停滞するグループもあった。

「正直、成果発表までに活動のまとめが間に合わなくてもよいと思っていました。教師に言われなくても動く経験を大事にしたかったからです。実は成果発表の後、ある生徒が『次はこんな課題を設定して探究学習に取り組みたい』

と私に申し出てきました。その生徒は、活動のまとめが発表までに間に合わなかったグループにいたのですが、満足できる成果が得られなくても次の目標を掲げる彼女の姿を見て、2学期の取り組みは生徒の成長につながったのだと、自信が持てました」（間柴先生）

1年次2学期までの探究学習によって、生徒は教師の指示を待たずに行動するようになった。その成長は2年次の現在も継続していると、1年生担任の吉本英寛先生は語る。

「現2年生は、自学自習の時間の長さや学習内容の質の高さが、これまでの2年生と明らかに違います。自分がするべきことを自ら始められているのは、探究学習の成果だと思います」

25年7月には、普通科アドバンスコース1・2年生の生徒が、大学教員や他校の生徒を招く探究発表会を企画した。プログラム立案や当日までの準備、発表会の進行などに主体的に取り組んだ2年生は、これから探究学習に取り組む1年生のモデルになっていると、1年生担任の嶋田利希先生は語る。

「2年生が、審査員をどのように会場に誘導するのかなどを話し合う中で、『初めて学校に来る人向けの校内案内動画が必要では?』といった、社会に開かれた学校づくりのアイデアがいくつも出てきました」

自分たちの行動を変えることで、学校の学びはもっと充実する。そのことに探究学習に取り組む生徒たちは気づき始めている。

●同校では、2025年12月22日（月）及び26年3月14日（土）に探究コンテスト「grow up meeting」を開催します。12月の回では大学教員などの審査員からアドバイスを受たり、高校生同士で意見交換をしたりすることで、各自が取り組む探究学習をブラッシュアップします。3月の回は最終発表の場です。参加を希望する高校は、同校の間柴教頭補佐までお問い合わせください。

事例で深める！

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

岐阜県立中津高校

より安心して学べる学校を目指し、 単元テストと多様な評価方法を導入

生徒の学力の実態に合わなくなつた定期考査を廃止

田村 貴校は定期考査を廃止し、単元テストを導入したと伺いました。

西尾 2023年度に中間考査を廃止して単元テストを導入し、24年度に期末考査も廃止しました。その

ようにした背景には、ここ数年定員割れが続ぎ、生徒の学力の多層化が進んだことがあります。定期考査の欠点者が以前よりも多くなり、転退学する生徒も少なくありませんでした。その状況を変えようと、当時の校長と各分掌の主任が議論した結果、生徒がより安心して学べる学校にするための方策の1つとして、定期考査を廃止することにしました。

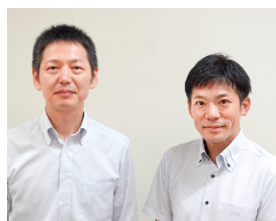
田村 定期考査が単に学力を測るだけのもので、生徒の学習改善に

資するものになっていなかったため、評価方法を見直したのですね。

単元テストは生徒がより安心して学べる学校づくりにどのように寄与していますか。

西尾 単元テストは各単元の基礎・基本を確認するものと位置づけ、授業内で行っています。出題範囲は直近3〜4週間分の授業の内容とし、生徒は20分程度で取り組みます。学習したことが身についているかをすぐに確認できる安心感に加え、定期考査に比べて出題範囲が狭い単元テストは高得点を取りやすいことが、生徒にとって学習に対する自信にもつながっています(図1)。

岐阜県立中津高校プロフィール



左から／西尾 豊(教務主任、理科[物理])、西山敏伸(進路指導主事、英語科)

設立 1906(明治39)年
形態 全日制・定時制／普通科／共学
生徒数(全日制) 1学年約200人
2024年度卒業生進路実績(全日制)
国公立大は、北海道大、東京海洋大、東京学芸大、富山大、金沢大、福井大、信州大、岐阜大、愛知教育大、三重大、広島大などに48人が合格。私立大は、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ229人が合格。

アドバイザー



文部科学省 初等中等教育局
主任視学官

田村 学 たむら・まなぶ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』(東洋館出版社)など多数。

田村 短いスパンで行う単元テストに切り換えたことで、生徒が学びへの手応えを感じる機会が増え、学習意欲を高めていることがうかがえます。教師にはどのような変化がありましたか。

西山 定期考査よりも出題範囲が狭まったため、教師は授業や作問の際に、以前よりも学習目標を意識するようになりました。評価をする頻度が高くなった分、自身の日々の指導内容を振り返る機会も増えました。

田村 生徒の視点に立った学習評価の改善が、学びと指導それぞれによい影響をもたらしていますね。

図1 教師が感じている単元テストを導入してよかった点

生徒にとって	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査に比べて出題範囲が狭いため、学習に取り組むやすい。 授業で学習したことが身についているかどうかをすぐに確認できるため、安心感が持てる。 毎週、いずれかの教科・科目で単元テストが実施されるため、学習が習慣化する。 テスト期間がないため、課外活動などを停滞させずに済む。
教師にとって	<ul style="list-style-type: none"> 出題範囲が狭いため、学習目標を明確かつ端的に示すことができ、教師も生徒も学習目標をより意識して授業に臨める。 自身の指導の成果・課題や生徒の理解度・つまづきをすぐに把握できるため、指導改善を短いスパンで図ることができる。

図2 単元テストを運用する上での課題と田村先生からのアドバイス

課題1 単元テストの実施は各教科・科目に委ねているため、教科・科目によって単元テストの実施回数が異なったり、複数教科・科目の単元テストの実施が特定の日に集中したりしています。

田村先生からのアドバイス

単元テストの実施回数は、全教科・科目で統一する必要はありませんが、極端に異なると、生徒は不公平さを感じるかもしれません。教科・科目間で回数を同程度にしたり、回数が異なる理由を生徒に説明したりするとよいでしょう。また、単元テストの実施が特定の日に集中することについては、各教科・科目の年間指導計画を基に、単元テストの実施日を集約して事前に調整することで、特定の日への集中を解消する方法が考えられます。定期考査を廃止して単元テストを導入した目的は、生徒がテスト期間だけ学習する状況を解消し、日常的に学習する習慣をつけることにあります。授業の進度の調整は難しいかもしれませんが、その目的を折に触れて教師間で確認し、指導計画に沿って授業を進めるという意識を高めていくとよいでしょう。

課題2 全教科・科目でレポート課題を評価材料にしましたが、多くの教師がまだ実践経験が浅く、試行錯誤が続いています。

田村先生からのアドバイス

ペーパーテスト以外の評価方法を取り入れることは、生徒の資質・能力を多面的に見取るという点でとても重要です。それ故、レポート課題だけにとらわれる必要はなく、プレゼンテーションや実技など、教科・科目の特性に応じた評価方法を検討してみてください。評価方法が多様になれば、生徒が発揮する資質・能力も多様になり、例えば、「Aさんは知識の習得は苦手だけれども、発表は得意だな。その資質・能力を伸ばせば総合型選抜で合格できるかも」といった可能性も見いだせます。また、教師は生徒の変容に気づきやすくなり、職員室などで「あの生徒はこう変わったね」といった前向きな話題が増えます。そうした明るい雰囲気生まれることも、生徒がより安心して学べる学校づくりにつながるでしょう。

※図1・2とも、取材を基に編集部で作成。

評価方法の多様化が、生徒の進路実現を支援する

西山 大学入試に対応するテスト

としては模擬試験を活用しています。生徒の成績は良好で、単元テストを導入して評価方法を改善した成果が表れていると感じています。ただ、単元テストの実施日が複数の教科・科目で集中する期間が生じている点が課題です（図2課題1）。

田村 単元テストの実施が平準化されれば、生徒は日常的に学習に

取り組みます。その意義を改めて学校全体で共有するとよいのではないのでしょうか。より安心して学べる学校づくりにおける単元テストの価値を再認識することが、教師が授業の学習目標をより意識する機会になるはずです。

西尾 生徒が見通しを持って安心して学べるよう、授業の進度が遅れた時にはその要因を分析し、改善に向けて検討していきます。

西山 評価方法にも課題があります。ペーパーテスト中心から多様

な方法を用いた評価に転換しようとしてレポート課題を導入しましたが、試行錯誤の段階です（図2課題2）。

田村 レポート課題だけでなく、プレゼンテーションや実技など、教科・科目の特性に応じた評価方法を幅広く検討してみてください。単元テストも必ずペーパーテストでなくてはならないということではなく、学習目標に応じて発表や論文の作成なども取り入れましょう。発表や論文などは総合型選抜などで課されるため、生徒の希望進路の実現

にもつながります。単元テストの取り組みの成果が模擬試験の結果に表れているということですから、単元テストを含む学習評価全体の設計を、総合型選抜への対応も視野に入れて見直すという方針であれば、先生方の納得感も高まるのではないのでしょうか。

西尾 本日整理することができた単元テストの意義や価値を、生徒を含めて校内で共有し、生徒の学びにおいて大切なことを意識して改善策を議論していきたいと思っています。



生徒支援の充実のための外部連携

大学生とのオンライン面談を導入し、 生徒の視野と可能性を広げる

長崎県立松浦高校

1分で分かる軌跡

地域の課題に取り組む探究学習に力を入れる長崎県立松浦高校。生徒の進路選択を支援する取り組みとして、教師の負担を軽減しつつ、生徒への個別支援をさらに充実させる方法として、校内の学習スペースを活用した大学生との1対1のオンライン面談を導入した。進路選択や日々の学習に関する大学生からのアドバイスを受けることで、学習スペースを利用する生徒のモチベーションが向上するとともに、そうした生徒の向うきな変化を目のあたりにしたばかりの生徒が学習スペースを利用し始めるなど、校内での進路意識の広がりと、個々の生徒の進路実現に向けた好循環が生まれている。

#外部連携 #学習スペース

学校概要

設立 1961（昭和36）年
形態 全日制／地域科学科・商業科／共学
生徒数 1学年約70人
2024年度卒業生進路実績
国公立大は、佐賀大、大分大、県立広島大、長崎県立大に4人が合格。私立大は、福岡大、長崎国際大、別府大に延べ5人が合格。短大・専門学校進学16人。就職22人。



校長
宮崎哲郎
みやざき・てつろう
同校に赴任して1年目。



教頭
川崎公隆
かわさき・きみたか
同校に赴任して3年目。



キャリア形成部主任
野口貴史
のぐち・たかふみ
同校に赴任して10年目。数学科。



2学年主任
茶園孝一
ちやえん・こういち
同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科（地理）。



まっナビプロジェクトリーダー
鶴田高悠
つるだ・たかひろ
同校に赴任して2年目。数学科。



キャリア形成部
鶴林慎平
うばやし・しんぺい
同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科（日本史）。

変革の背景

探究学習で成長した生徒の進路実現を支援したい

長崎県立松浦高校は近年、同校の所在地である松浦市在住の中学生の多くが市外の高校に進学するようになったことから、自校の魅力化・特色化が課題となっていた。そこで同校は、2022年4月に普通科を地域科学科へと改編し、松浦市をフィールドにふるさとの未来を考える3年間の探究学習「まっナビ・プロジェクト」を学校設定科目として



写真 生徒が放課後や休日に自学自習できるように、学習スペース「松高学び場」を24年度から校内に設置した。

強力で推進することで、自校の魅力化・特色化を進めてきた。

2学年主任で、24年度までまっナビプロジェクトリーダーを務めた茶園孝一先生は、「まっナビ・プロジェクト」は生徒に大きな成長をもたらしたと語る。

「探究学習を通して自分の考えを他者に伝える力が生徒に身についたこと、大学教員や企業の方と協働して地域の課題に粘り強く向き合える生徒が増えたことなど、確かな成果がありました」

探究学習で培われた生徒の資質・能力を、より確実にそれぞれの希望進路の実現へとつなげたいという教師たちの思いが大きくなる一方で、課題もあったと、キャリア形成部主任の野口貴史先生は語る。

「探究学習で設定した課題を、大学に進学してからさらに深めてほしいと教師が思うような生徒でも、進学に消極的だったり、理系科目に秀でた生徒が、探究学習で設定した文系的な課題に固執して多角的に進路を考えられなかったりするなど、生徒の探究学習と進路選択の連携に

課題を感じることもありました」

変革の一手①

校内に学習スペースを設置。志望理由書講座などを開催

同校は24年度に、生徒が落ち着いて自学自習ができる学習スペース「松高学び場」を校内にオープンした（写真）。平日は午後5時30分から午後8時30分まで、土日祝日は午前8時30分から午後4時30分まで利用が可能で、学習スペースの監督は地域住民が担っている。そのような運営体制は、同校の魅力化・特色化を支援する松浦市からの補助を活用することで実現できており、教師の実務負担を増やさない持続可能なものとなっている。

「松高学び場」を自学自習にとどまらない生徒支援の場にしたいという思いは当初からあり、探究学習と進路選択の連携に関しても模索をしていました。大学生を講師とした志望理由の書き方講座を開催したこともありました」（野口先生）

松浦市内には大学や短大が設置されていないため、生徒が学習や進路面で刺激を受ける機会は都市部の生徒に比べて少ないという現実があった。同校の教師は、生徒が学習や進路面で刺激を受けられるような機能を「松高学び場」に持たせることで、その価値を最大限に引き出せないかと考えるようになった。

変革の一手 ②

オンラインを活用して 大学生と気軽に面談

そうした中で25年4月、同校は松浦市、ベネッセコーポレーションと連携協定を結び、大学生との1対1のオンライン面談「学習・進路の先輩コーチ」(図)を試行的に導入した。その取り組みは、大学入試を自学自習で突破した大学生から日々の学習や進路に関するアドバイスをもらうことで、「松高学び場」での学習を充実させたり、進路選択における視野を広げたりすることがねらいだ。取り組みにかかる費用の一部は松浦市が負担し、希望する生徒は1回25

分間のオンライン面談を月2回、月額1000円で利用できる。

3年生担任を務める鶴林慎平先生は、「オンライン面談を利用する生徒は、学習方法だけでなく、志望大学の選び方など、大学生に様々な相談をしている」と話す。

「『大学入試の攻略の第一歩は、授業に集中すること』など、私たち教師が普段から伝えていたことが、大学生の言葉で伝えられるとより説得力を持って届くようです」

オンライン面談を生徒個々の指導に生かすため、鶴林先生は、「学習・進路の先輩コーチ」を利用した生徒に対して、「オンライン面談で学んだこと」「その学びを生かして自分でやってみようと思ったこと」をアンケートで聞き、その回答内容を学年団の教師で共有していきたいと考えている。

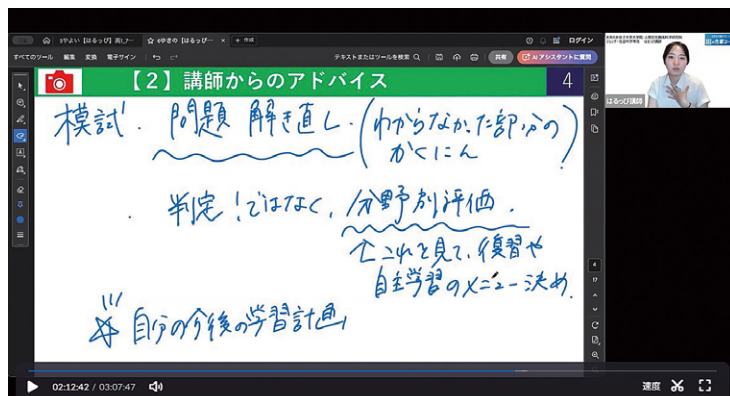
「年齢の近い大学生だからこそ、生徒は自分が抱えている悩みや困りごとを素直に伝えられるのだと思います。そうして大学生とやり取りを行い、その中で生徒が気づいたことや学んだことは、私たち教師の教科指導や進路指導の改善のヒントにな

図 大学生との1対1のオンライン面談「学習・進路の先輩コーチ」

大学入試を自学自習で突破した大学生が、高校生とオンラインで面談し、学習や進路面の悩み・相談に応えるサービスで、教師への負担の軽減を実現しながら、生徒一人ひとりの個別最適な学びの充実を図ることを目指した、松浦高校・松浦市・株式会社ベネッセコーポレーションによる試行的な取り組み。

大学生が高校生の悩みや疑問に真摯に耳を傾けながら、自身の高校時代の学習や進路選択の経験を踏まえてアドバイスするため、高校生にとっては日々の学習や進路選択での具体的な行動変容につなげやすくなる。今後は、文理選択などのテーマでの進路講演会もオンラインで開催する予定だ。

■ 大学生との1対1のオンライン面談



■ 利用した生徒のコメント

学習の計画を立てる際はまず、月間の目標を立て、それを達成するための週間計画、そして1日1日の計画を立てることで、目標に向かって頑張れる計画が立てられることが分かった。

大学はできるだけたくさん調べて自分に合うところを見つけていくことが大事ということが分かった。上手な暗記方法も教えてもらえてよかった。

進路を決めるために調べるべきことや苦手教科の勉強法、模擬試験に向けてするべきことなどを教えてもらった。専門学校だけでなく、大学についても調べてみようと思う。

大学選択の考え方が自分と親とで異なる場合に、どのように自分の考えを親に伝えればよいかが相談できた。苦手教科の勉強法についても教えてもらった。

■ 利用した松浦高校の生徒が感じたメリット（上位3項目抜粋）

項目	割合
実体験を踏まえた具体的な勉強法や進路選択法が参考になる	71.4%
アドバイスが具体的だから取り組みやすい	61.9%
年齢の近い先輩だから親しみが持てて話しやすい	38.1%

※学校資料を基に編集部で作成。

大学生との1対1のオンライン面談「学習・進路の先輩コーチ」については下記のウェブサイトをご覧ください。

▶▶▶ <https://kou.benesse.co.jp/senpai-coach/>

るはずだと考えました」（鶴田先生）

変革の成果と展望

校外の力を借りることで 学校がさらに活性化

「松高学び場」で大学生とのオンライン面談が始まって約6か月。その成果として、まつナビプロジェクトリーダーの鶴田高悠先生は生徒の様々な変化を挙げる。

「最初はオンライン面談に関心を示さなかった生徒が、同級生や先輩が利用する姿を見て興味を持ち、オ



大学生との1対1のオンライン面談に臨む3年生。この日は、秋以降の受験勉強の進め方などを相談した。

ンライン面談を希望するといったケースが増えています。また、オンライン面談を通して『松高学び場』に関心をもち、就職や専門学校志望の生徒が『松高学び場』に足を運ぶ姿も見られるようになりました」

鶴田先生は、探究学習と進路選択の連携を充実させるため、生徒が大学の学問について広く知る機会を「まつナビ・プロジェクト」の中に設けることを構想している。野口先生は、鶴田先生の構想を実現する上で、大学生とのオンライン面談がヒントを与えてくれるのではないかと期待している。

「探究学習で設定した課題がどんな進路につながるのか、取り組んだことをどのように大学入試での面接や小論文で生かすかといったことも、オンライン面談で相談するよう、生徒に促したいと思っています」（野口先生）

地域住民や企業、さらには行政などと密にかかわりながら「まつナビ・プロジェクト」を展開している松浦高校だが、同プロジェクトを担当する教師が異動しても持続可能なも

のとするためには、学校外の多様な人たちの力を借りることが不可欠だと、川崎公隆教頭は考えている。

「本校が探究学習を推進できているのは、学校を応援してくれる人たちが地域にたくさんいるからです。校外の人の力を借りるという点では、大学生とのオンライン面談も同様です。松浦市内外のいろいろな人が応援してくれる学校であることは、地域の中学生にとって、本校を目指す理由の1つになるはずです」

外部の力を借りつつ、学校の力を外に発信していくことも重要だと、宮崎哲郎校長は考えている。

「地域の方から『空き地の活用方法について生徒の意見を聞きたい』などと相談されることがあります。松浦高校なら何かできるかもしれないと期待してもらえるのがとてもありがたいです。今後も一層外部の力を学校に取り込みつつ、学校の力を外部に発信しながら教育活動を改善していきたいと考えています」

DXハイスクールとしての挑戦

先端技術を活用して 未来を切り拓く生徒を育てる

校長 宮崎哲郎

読者の皆さん、P.38の写真に写っているドローンに気づきましたか。「DXハイスクール」に指定されている本校は、探究学習においてドローンや3Dプリンターの活用を積極的に進めています。



ドローンを活用した取り組みの例としては、市内の中学校のグラウンドでの除草剤の散布や、松浦市の農業委員会と連携し、農地が正しく利用されているかを見回るパトロール活動などを川崎教頭が中心となって行い、地域から高い評価を得ています。大学生との交流同様、先端技術の活用も、生徒が地域や自分自身を新たな視点で見つめ、課題に向き合うことにつながります。地域との連携を土台に、郷土に根差し、先端技術を使いこなして未来を切り拓く生徒が、1人でも多く育ってくれることを心から願っています。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

現3年生のデータから見える、 今後の進路・学習指導のポイント

今号は、2025年度「スタディーサポート・3年生第1回」における進路意識・学習状況と25年度進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」における志望動向の2つのデータを基に、生徒の希望進路の実現に向けた今後の進路指導と学習指導のポイントについて考える。

現3年生の志望動向と学習の特徴

総合型・学校推薦型選抜を希望する生徒が増加

まず、2025年度「スタディーサポート・3年生第1回」の分析結果を基に、現3年生の進路意識と学習状況について整理する。

「希望する入試方式」を尋ねた設問では、24年度と比較して一般選抜を希望する割合が減少し、総合型・学校推薦型選抜を希望する割合が増加。近年、総合型・学校推薦型選抜の募集人員は拡大傾向で、同方式での受験を希望する生徒が増えている（図1）。

25年度の傾向として、学力試験型の年

内入試の新規導入が見られることにも触れておきたい。25年6月に文部科学省が示した「令和8年度大学入学者選抜実施要項」では、総合型・学校推薦型選抜において、2月1日より前に教科・科目に係る個別テストを実施できる旨が明文化された（*1）。24年度に東洋大学で新たに実施された年内入試「学校推薦型選抜基礎学力テスト型入試」（25年度は総合型選抜に変更）と同様の形式の入試が広がる可能性が高い。これまで以上に年内入試の可能性を含めた受験戦略を考えることが求められそう。

例年に比べて受験勉強のスタートが遅い生徒が多い

「受験勉強の進み具合」について尋ねた設問では近年、「受験勉強を始めるのはまだ先でよい」と回答する生徒が増加している（図2）。しかし、それ以上に「スタートが遅れてしまい、かなり焦っている」と回答する生徒が増加しており、ここ6年間で最も割合が高かった。

総合型・学校推薦型選抜が拡大し、受験の時期が早まる傾向にあることに逆行して、受験勉強のスタートが遅い生徒が例年よりも多い点には注意したい。

国公立大学・私立大学ともにやや強気の志望動向

次に、25年度進研模試「大学入学共通

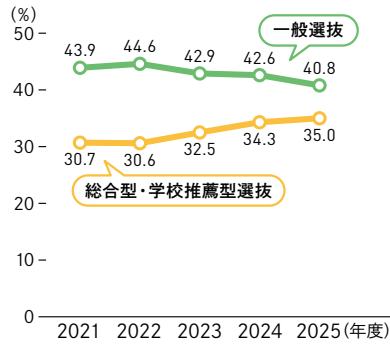
テスト模試・6月」における志望動向を見ていく。国公立大学全体の志望者数は対前年指数99で、日程別に見ると、前期日程の志望者数は対前年指数100と前年並みであったのに対し、縮小・廃止が続く後期日程の志望者数は対前年指数96と減少した。

大学群別では、難関国立10大学の志望者数は対前年指数101、ブロック大学は99、その他の国公立大学は98と、入試難易度が高い大学群ほど高かった（図3）。教育課程の変更に伴う入試変更が一段落し、受験生の強気の志望傾向がやや強まっていることが見て取れる。

私立大学全体の志望者数は対前年指数97と減少したのに対し、早慶上理、MARCH、関関同立の難関13私立大学の志望者数は対前年指数101と前年並みとなった（図4）。入試方式別に見ると、

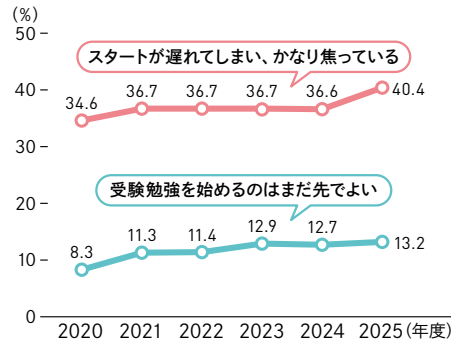
* 1 ただし、「小論文・面接・実技試験等」または「志望者本人が記載する資料や高等学校に記載を求める資料等」と組み合わせて実施することが求められる。

図1 希望する入試方式



※各年度の「スタディーサポート・3年生第1回」の全国集計値を基に作成。

図2 受験勉強の進み具合



※各年度の「スタディーサポート・3年生第1回」の全国集計値を基に作成。

私立大学全体では共通テスト方式の志望者数の減少が目立つが、難関13私立大学では入試方式による志望者数の対前年指数の差はほぼ見られなかった。難関国立大学全体の志望者数が増加していることから、共通テスト方式での難関私立大学の併願を検討している受験生が

図3 国公立大学・大学群別の志望動向

	志望者数		指数
	25年度	24年度	
難関国立10大学	147,971	146,671	101
ブロック大学	180,412	182,307	99
その他の国公立大学	503,986	511,691	98

※2025年度進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」より
 ※難関国立10大学：北海道大学、東北大学、東京科学大学、東京大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、九州大学。
 ※ブロック大学：筑波大学、千葉大学、横浜国立大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、広島大学、熊本大学、東京都立大学、大阪公立大学。

学部系統別の志望動向を見ると(図5)、国公立大学では、語学、経済・経営・商学系統などで志望者数が増加した。一方で、人文科学、生活科学、薬学系統などで志望者数の減少が目立った。私立大学では、多くの学部系統で志望者数の対前年指数が100を下回った。中でも生活科学、薬学系統などでの志望

者数の減少が目立った。生活科学、保健衛生学、薬学系統などでの志望者数の減少は国公立大学と私立大学で共通しており、資格志向が弱まっていると考えられる。

資格志向の弱まりが見られる

多いと考えられる。受験勉強のスタートが遅い生徒が多い中、志望は強気の傾向であることを踏まえた学習指導が求められると言える。

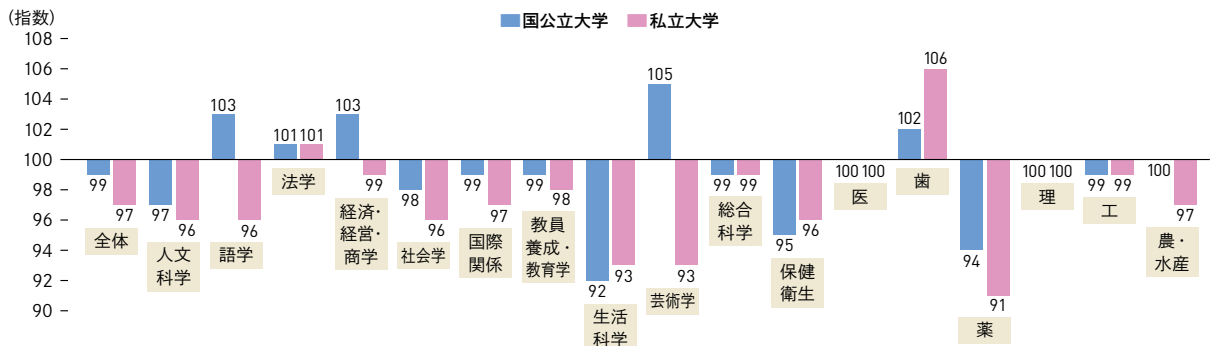
図4 私立大学・大学群別の志望動向

	一般方式			共通テスト方式			合計		
	志望者数		指数	志望者数		指数	志望者数		指数
	25年度	24年度		25年度	24年度		25年度	24年度	
私立大学全体	1,044,474	1,062,539	98	422,170	444,708	95	1,466,644	1,507,247	97
難関13私立大学	242,273	239,781	101	116,336	116,809	100	358,609	356,590	101
早慶上理	49,209	48,894	101	26,563	27,037	98	75,772	75,931	100
MARCH	104,072	103,387	101	53,346	53,293	100	157,418	156,680	100
関関同立	88,992	87,500	102	36,427	36,479	100	125,419	123,979	101

※2025年度進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」より
 ※早慶上理：早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、東京理科大学。
 ※MARCH：明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学。
 ※関関同立：関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学。

者数の減少が目立った。生活科学、保健衛生学、薬学系統などでの志望者数の減少は国公立大学と私立大学で共通しており、資格志向が弱まっていると考えられる。

図5 学部系統別の志望動向



※2025年度進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」より。 ※数値は前年度を100とした時の指数。

受験勉強のスタートが遅れ、 焦っている生徒に対する指導

E判定でも合格する受験生は
少なくないことを伝える

受験勉強のスタートが遅れたと焦る生徒は、模擬試験の合格可能性判定が芳しくないと弱気になり、志望校の変更を考え出すかもしれない。そのような生徒には、E判定だった受験生が合格するケースは少なくないことを伝えることで、前向きにさせたい。例えば、明治大学文学部の25年度入試では、9月時点で志望者の7割がE判定であり、合格者の4割はE判定だった(図6、7)。進研模試のE判定は合格率20%未満となるように設定しているが、私立大学は受験日が多く、E判定の受験者も多いため、合格者に占めるE判定の受験者の割合も高くなる傾向がある。それを生徒に伝えることで、判定が芳しくないから諦めるのではなく、合格可能性の高い併願校を押さえるなどして、積極的に第1志望校に挑戦できるような受験戦略を組み立てさせたい。

入試方式の特徴を踏まえ、
年内入試への出願を見極める

総合型・学校推薦型選抜の受験を希望する生徒が増加する中、同方式に出願する見極めが一層重要になってきている。総合型・学校推薦型選抜には、教科学力を重視する場合もあれば、志望理由を重視する場合もある。教科学力を重視する場合は、秋の段階で志望理由が固まっていないう生徒でも、学力基準がクリアできれば、一般選抜と並行して対策を進めやすいため、出願を前向きに検討してよいだろう。そうした見極めに活用したいのが、第1回出願指導WEB研究会で提供した「入試方式別合格者数分布」や「教科学力で合否が決まる募集単位・決まらない募集単位」(図8)などのデータだ。試験内容の詳細や合格者の特徴は「受験レポート」などで確認できる。出願から受験対策まで、データを活用した指導を充実させ、生徒を支援していきたい。

図6 高3生9月模試時点の志望校判定(受験者全体)

◎2025 年度入試 明治大学文学部



図7 高3生9月模試時点の志望校判定(合格者のみ)

◎2025 年度入試 明治大学文学部

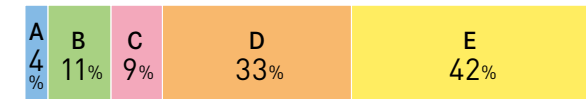


図6、図7 ※2025 年度入試結果調査及び2024 年度「第1回ベネッセ・駿台大学入学共通テスト模試」の両方のデータがある生徒を集計。

図8 「2025 年度 教科学力で合否が決まる募集単位・決まらない募集単位」

ハイスクールオンラインで下記のデータを確認できます。
詳しくは P.45 の告知をご覧ください。

区分	エリア	大学CD	大学名	学部	学科	入試方式	教科学力の合否 影響区分	合格者平均より 上の合格率	合格者平均未 満の合格率	合格率の差	合格者平均より 上の人数	合格者平均 未満の人数
国立	北海道	1010	小樽商大	商		総合型選抜	A	71	12	60	7	17
国立	北海道	1010	小樽商大	商		推薦型選抜	A	71	29	42	65	140
国立	北海道	1010	小樽商大	商夜		推薦型選抜	D	75	67	8	12	9
国立	北海道	1030	北教大旭川校	教育		推薦型選抜	B	62	42	21	53	36
国立	北海道	1035	北教大岩見沢校	教育		総合型選抜	B	55	26	29	11	31
国立	北海道	1040	北教大釧路校	教育		推薦型選抜	D	81	86	-6	36	22
国立	北海道	1045	北教大札幌校	教育		推薦型選抜	D	29	33	-4	65	21
国立	北海道	1050	北教大函館校	教育		推薦型選抜	C	71	51	19	41	37

※進研模試偏差値は2024 年度「進研模試3 年生7 月記述」「第2 回ベネッセ・駿台記述模試」に基づいて算出。

※学習到達ゾーンは、進路マップ得点と進研模試偏差値との相関に基づいて算出。

※集計できた合格者平均より上の人数及び下の人数がともに5 人以上の方式を掲載対象としている。

※集計に用いる教科は以下の通り。

〈国公立大学〉3 教科〈私立大学・短期大学〉文理別2 教科

文系：国英、理系：数英を使用。「文系」「理系」は、弊社独自の文理区分に基づいて決定。各学部の学科・専攻(募集単位)で文理が混在している場合は、割合の多い方にそえた上で全募集単位を集計。

合格者の平均に該当する学力到達ゾーン (GTZ) より上の GTZ の合格率と下の合格率の差によって4 段階で判別。

A：強く影響する (30 ポイント以上、一般選抜と同程度)

B：影響する (20 ～ 30 ポイント)

C：影響が小さい (10 ～ 20 ポイント)

D：ほぼ影響しない (10 ポイント未満、教科学力で合否の差がほぼついていない)

奄美群島の高校全9校が集結し、 探究学習の成果を発表

「高校生サミット IN 奄美 2025」レポート

鹿児島県の南方の海上、南北約 200km の間にある 8 つの有人島から成る奄美群島。その中に 9 校の高校が点在し、約 2,000 人の生徒が学んでいる。地理的条件が厳しい中で探究学習に取り組む生徒を支援しようと、2024 年 3 月に結成されたのが「奄美群島高校探究コンソーシアム」だ。25 年 3 月には島内外から生徒が集まり、同コンソーシアム主催の探究学習の発表会と生徒の交流会が行われた。その様子をレポートする。



写真上／サミットでの発表の様子。
写真左／生徒の交流会の様子。

離島の探究学習を支援するため、 コンソーシアムを結成

探究学習の支援を大学に依頼したいが島内に大学がない、探究学習の成果を校外でも発表したいが費用面で島外の大会に参加することは難しい。そうした地理的条件から生じる課題がある中で探究学習に取り組む生徒を支援するため、2024 年 3 月、鹿児島県の奄美群島の高校 9 校と、鹿児島大学などの大学等によって、「奄美群島高校探究コンソーシアム」が結成された。

豊かな自然や独自の文化を持つ奄美群島には多くの研究者が訪れる。そこで、そうした研究者が所属する大学・研究機関にコンソーシアムへの参画を依頼。探究学習の支援が可能な研究者の情報を一覧にして、群島内の高校で共有し、各校が参画機関や研究者に直接依頼できるようにした(図1)。コンソーシアムの発起人の 1 人である鹿児島県立大島高校(以下、大島高校)の貴島邦伸前校長(現・鹿児島県立楠井中学校・高校校長)は、こう説明する。「研究者が来島した際に生徒に助言・指導してもらう仕組みにすれば、研究者に大きな負担をかけることなく、生徒の探究学習を支援してもらえるのではないかと考えました」

24 年度には 4 校がその仕組みを利用。25 年度は、サンゴの生態調査や奄美の方言などのテーマで大学教員に支援を依頼している。コンソーシアム事務局を担う大島高校の中渡瀬将之先生は、「登録研究者の一覧に『支援可能な内容』が記載されているため、誰に何を依頼できるかがひと目で分かり、大学や研究者にスムーズに依頼できました」と語る。

他校生も集まるサミットでの 発表が、生徒の目標に

25 年 3 月には、大島高校を会場に、同コンソーシアム主催の「高校生サミット IN 奄美 2025」が行われた。生徒が大勢の人の前で探究学習の成果を発表し、同世代と交流する場として同サミットを企画した。同サミットの開催は今回が 2 回目で、コンソーシアム参画校全 9 校と、中渡瀬先生が以前勤務していた神奈川県・横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校が参加。大島高校の 1・2 年生全員がコンソーシアム参画大学の教員、サミットを支援する地元企業の来賓を前に、各校の代表チーム計 28 人の生徒が発表した(図2)。「探究テーマは伝統文化や自然、地域の社会課題など、多岐にわたっていました。代表チームの選考は各校に一

おきのえらぶ
沖永良部
高校

しょうなん
樟南第二
高校

各校の探究学習の支援

参考機関

鹿児島大学、東京大学
大気海洋研究所、志學
館大学、第一工科大学、
鹿児島国際大学、鹿児
島純心大学、駒澤大学
応用地理研究所、株式
会社アーダン

とろん
与論
高校

きかい
喜界
高校

とくしま
徳之島
高校

こちや
古仁屋
高校

おしま
大島北
高校

おしま
大島高校
事務局校

やまぐち
奄美
高校

№.	氏名	所属	専門分野	高校生に提供できる テーマ及び講座 等	連絡先 (Email)	その他（奄美群島への来訪 予定、旅費・報償費 等）
1						
2						

<https://sites.google.com/kago.ed.jp/iamamiconsortium/>

※図1・2ともに、「奄美群島高校探究コンソーシアム」提供資料を基に編集部で作成。



写真1 大学教員の質問に堂々と回答する生徒たち。
サミットの様子はライブ配信され、参加校の生徒も視
聴可能にした。アーカイブは下記動画サイトで公開中。
<https://www.youtube.com/@koukouoshima9827>

任していますが、各校の話によると、本サミットでの発表が生徒の1つの目標になっているそうです」（貴島前校長）

各チームの発表後には、大学教員5人による質疑応答と指導・助言が行われた（写真1）。教員住宅の老朽化を調査した鹿児島県立与論高校のチームには、「よい着眼点だと思う。生徒にとって身近な存在である教師の福利厚生にかかわり、社会課題としても重要だ」と評価しつつ、「参考文献が新聞記事だけだった。研究論文を調べて掘り下げる」とさらによくなると思う」などと助言した。また、黒糖焼酎について探究した鹿児島県立奄美高校のチームは、休憩時間に大学教員に探究学習の方向性について相談。大学教員は、「酒にはそれにまつわる独自の文化がある。飲

酒のできない高校生だからこそ、文化から探究してみては？」と助言した。

発表を聞いた会場の大島高校の1・2年生にも、多くの気づきがあった。「テーマ設定が重要だと感じた。しっかりと軸がないと、探究がいろいろな方向にぶれてしまふ」「どのチームも粘り強く取り組んでいた。その姿勢を自分も持ちたい」など、様々な声が聞かれた。

最後に、生徒の企画・運営による交流会が実施された。「あなたが帰ってきたくなる故郷とは？」など、3つの話題で10校の生徒が意見を交わした。企画・運営を担当した生徒は、「奄美のことを考えて行動している高校生がこんなにいる。力を合わせて奄美の未来をつくっていきたい」と力強く述べた。

一連の取り組みは、離島という環境で大学教員との対面交流の仕組みを構築したことなどが評価され、独立行政法人教職員支援機構の第8回N-I-T-S大賞を受賞した。25年度からは、奄美群島全12市町村が参画する「奄美群島広域事務組合」など、地域の支援を受けて、活動を継続している。

「今後は各校の探究テーマを共有し、同一のテーマがあれば共同研究を行うことなどを検討中です。高校と大学、地域が連携し、一体となって地域の人材を育てていきます」(中渡瀬先生)



「学校のイメージキャラクターって、いつからあるんだろう」。先日、取材で訪れた長崎県立松浦高校で、ふとそんなことを考えました。少なくとも私の高校時代には、そうした存在はなかったはずです。

松浦高校には「まつドリー」という、生徒たちに愛されているキャラクターがいます。驚いたのは、それがイラストの世界を飛び出し、3Dプリンターで見事な立体マスコットになっていたこと。生徒たちの「好き」や「面白い」という純粋な気持ちが、デジタルの力を借りて、触れることのできる「形」になる。その光景は、とても新鮮なものでした。私が子どもの頃の立体化と言えば、オーブントースターで温めて縮める「プラバン」がせいぜいだったなあ……などと懐かしく思い出し、改めて時代の進化を実感しました。

想像したものを、もっと自由に、もっと確かに形にできる。そんな素敵な道具を手にした生徒たちが、これからどのような未来を創造していくのか。まぶしい気持ちになった取材でした。(守安)

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!



『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします!

【友だち登録の方法例】

- ・(方法①) 上の2次元コードを読み取る
- ・(方法②) LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」と入力して追加

VIEWnext

高校版 2025年11月号

11月28日発刊
(予定)

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2025年7月号へのご意見

生徒が自分で考える時間の重要性を実感

「中核的な概念」をテーマにした7月号の特集は、非常に勉強になった。課題整理の記事で、京都大学大学院の石井英真^{てるまさ}教授が述べていた「生きて働く学力を育成するためには、問いと答えの距離を長くすることが重要」という考えに共感した。知識を「分かる」「使える」ようにするために、生徒が自分で考える時間を持つことが重要だ。考える力や想像する力を養うことは、新たな創造につながる。それは社会人になった時、非常に大切な力となるだろう。

愛媛県・私立松山聖陵高校 大谷修一

教師が複数で授業づくりをする体制が必要

7月号の特集の課題整理の図3では、「中核的な概念」をキーに考える授業のポイントが分かりやすくまとめられていた。特に「網羅的な授業からの脱却」は重要であり、意識していきたいと思った。ただ、生徒が自力で「中核的な概念」を獲得するためには、問いの設定など、入念な授業づくりが求められる。生徒が協働的な学びをするように、教師も複数で授業づくりをする体制が必要だ。まずは自分の授業を他の教師に見てもらいことから始めたい。

静岡県・静岡市立清水桜が丘高校^{といたのりみ} 樋田範文

特集の事例記事を参考に、自分の授業を進化させたい

担当する国語の授業では、様々な文章に活用できる読み方を指導しているが、7月号の特集の実践事例1 国語の記事で、青森県立青森中央高校の笠井敦司先生は、「読むこと」だけでなく「書くこと」にも応用できる「中核的な概念」を指導されていた。自分の指導の未熟さに気づくとともに、「中核的な概念」の具体とその指導法を学べた。自分の授業に取り入れ、指導をよりアップデートしていきたい。

千葉県 匿名希望

困っている生徒の声を社会に伝え続ける

7月号の「先生なら、どうしますか?」で宮崎県立延岡星雲高校の柳井健二先生の記事を読み、学級担任が家庭の状況をどこまで理解すべきかは難しい問題だと改めて考えさせられた。家庭の問題は一担任だけでは解決できないものばかりで、社会全体で取り組む必要がある。その中で、社会に向けて生徒の叫びを伝えていくことは、教師の使命だと思う。一人ひとりの力は小さくても、団結し、粘り強く伝えることで、社会改革につながるものと信じている。

宮城県・私立東北生活文化大学高校^{すとうゆうこ} 須藤由子

「対話的な学び」における教師のあり方に共感

7月号の「主体的・対話的で深い学び 授業実践」(化学)の記事で、茨城県・私立土浦日本大学高校の星野恵美子先生が、「対話的な学び」のあり方として、「私との対話を通じて」という教師のあるべき姿を明確にしている点に共感した。特に学力的な課題を抱える学校では、記事にあった「疑問を解消する面白さを感じる」ことや、「根拠を持って論理的に述べる」ことを生徒が学ぶのは、生徒同士の対話からだけでは難しく、教師主導で思考を促した方がよいと考える。また、成果として「化学での学びを他教科での学びに生かす」ことができているのは、まさにコンピテンシー・ベースの教科横断的な取り組みだと感じた。

北海道滝川西高校 三井智和

アーカイブ動画公開のご案内

管理職、分掌主任先生向けオンラインセミナー

新たな進路・キャリアデザインを考える ～“なぜ学ぶのか？”のその先へ～

弊社は2025年7月29日(火)にオンラインセミナー「新たな進路・キャリアデザインを考える～“なぜ学ぶのか？”のその先へ～」を開催しました。「第1部：進路・キャリア教育の今と未来」「第2部：^{とまのいっとく}苦野一徳先生の特別講演」「第3部：新サービスの概要・詳細」の3部構成の本セミナーに参加した先生方からは、「もう一度視聴したい」「校内の先生に共有したい」といった反響を多くいただきました。そこで、この度、アーカイブ動画を公開する運びとなりました。これからの学びの設計のご検討に向けて、ぜひご視聴ください。

アーカイブ動画は、
右記のURL、または2次元コードから
ご覧ください。

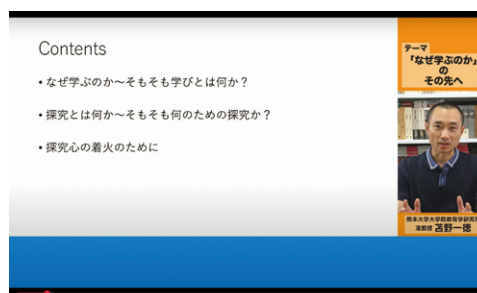
URL <https://benesse-hs.jp/wfk8v>

2次元コード



^{とまのいっとく}
登壇者 苦野一徳先生

哲学者・教育学者。熊本大学大学院教育学研究科准教授。早稲田大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。経済産業省「産業構造審議会」委員、熊本市教育委員のほか、全国の多くの自治体・学校等のアドバイザーを歴任。



演題 新たな進路・キャリアデザインを考える ～“なぜ学ぶのか？”のその先へ～

「なぜ学ぶのか？」という根本的な問いの共有や学びの動機づけ、主体的な進路・キャリア形成の重要性について、お話をいただきました。苦野先生は、学びの本質は「豊かさを得ること」と「自由に生きること」にあり、学びは喜びや自己成長を促すものだと考えると述べられました。加えて、子どもたちの探究心を育むためには、魅力的なコンテンツや共同作業、自己決定の環境を整えることが重要であると指摘されました。また、教育の目的は「子どもたちが自らの人生を選び取る力を育むこと」にあるとし、学びへの抵抗感を減らし、未来を描くための支援や環境整備についても考察をいただきました。

オンラインセミナー開催のお知らせ

2025年10月30日(木)に開催 管理職先生向けオンラインセミナー

本セミナーは、教育現場の変化や課題に対応し、よりよい学校づくりを目指すために管理職に求められることをテーマとする予定です。詳細は下記ウェブサイトでご案内しています。ぜひご参加ください。

本セミナーの詳細とお申し込み方法は、
右記のURL、または2次元コードから
ご覧ください。

URL <https://benesse-hs.jp/t75zg>

2次元コード





生徒と創る学びの情景

君ならできる

北海道札幌西陵高校 渡辺^{みく}未来先生

高校生活最後の文化祭の出し物。3年2組は皆で話し合っダンスに決めたものの、ステージ部門の生徒たちの心にはどこか引っかかるものがあった。担任の渡辺先生に相談すると、「流行のダンスをまねるだけなら、ほかのクラスとかぶらない？ 観客のことは考えた？」と問いかけられ、生徒たちははっとした。「それまでは、自分たちのやりたいことや準備の負担を減らすことばかりに気を取られていました。企画を一から練り直し、観客のことを意識して、笑いの要素などを取り入れた劇を創り上げました。当日は大盛況でした」と、生徒たちは笑顔で文化祭を振り返る。渡辺先生は、「生徒は失敗することが不安で、挑戦することを避けがちです。でも、困難を乗り越えた先に、人としての成長があります。そのことを根気よく伝えて、挑戦する姿勢を引き出すようにしています」と語る。

「生徒に求めていることは、まずは自分が実践しないと」と、渡辺先生は若手教師の1人として積極的に新しい取り組みに挑戦。今年度は、総合型選抜の対策として、グループディスカッションの放課後講座を企画・運営した。生徒に言っている「君ならできる」を自身にも言い聞かせ、生徒の未来のために走り続ける。

わたなべ・みく 同校に赴任して3年目。3学年担任。進路指導部。理科（化学、生物）。

北海道札幌西陵高校 1977（昭和52）年設立／全日制／普通科／共学／1学年約240人／2024年度卒業生進路実績 国公立大は、小樽商科大、北見工業大などに4人が合格。私立大は、北海道医療大、北海道科学大、東洋大などに延べ139人が合格。短大・専門学校進学88人。就職11人。